

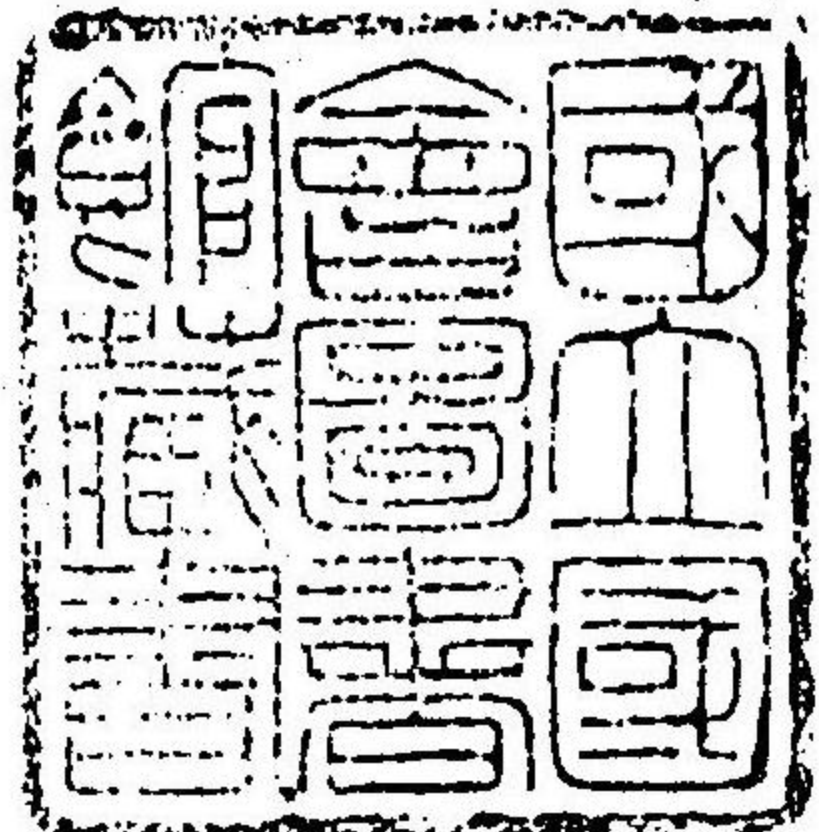
文學士岡田正美著

(訂正
增補 第二版)

日本
文法
文章法大要

東京 吉川半七發行

815.0444n(Ch)



337138

日本文章法大要

第二版の凡例

本書初版の分残部僅少となり、至急に再版するを要するに依り、訂正文は、増補せらるべき件あらば此際至急に、書肆よりおぼく追られて、活字の誤を正し、且つ、跋や何や不用なる條項を削除する傍、文の主義、文の成分の條下には聊か不足を補ひ、動詞の分類、補足部、文の解剖圖、文の種類、文の雜例、意義の上よりの文の分類、呼應の諸條下には聊かつ、の改訂を加へ、副詞法、正主語變主語本主語支主語、并に、正序法の條下には大改訂を加へたり。尙ほ、此等の他にも改訂を加ふべき處なきにあらざれども、病尋に在りて心氣甚だ疲勞せる折から、初志の十が一をも果す能はず、大方は遺憾ながら次回の印刷の時を期して止みぬ。乞くは讀者之を諒せ

凡例

よ。

明治三十四年三月

岡田正美識

第一版の凡例

一本書は予が、昨年夏、國語傳習所夏期講習會に於て講述したりしものなり。初め、同所より、その講義筆記を講義録として出版せんことを切に懇望せられたりしが故に、止を得ず、承諾して、聽講者の一人たりし下石氏に托して、同氏の筆記を本として、本書の原稿を作りて貰ひたりき。然るに、近頃に至りて、同所に於ては本書の出版を中止したり。之に依りて、本書は單行本として吉川書肆より出版せしむることとなりたり。

一さて、既に單行本として出版せしむるに至りたる以上は、辭句の上にて、又、叙述方に於て、大に改訂を加ふべき筈なり。されど、今はその暇なきが故に、少しく訂正を加へたるのみにて止めぬ。再版の時をまちて大修正を加ふべし。

一前記講習會に參集したりし聽講者は大方は、落合、大槻、和田、三土、諸氏の著書に依りて文法を一わたりは修めたるものなりしが故に、或る點に於ては、やゝ異なりたる説を聞かせんもよかるべく、又、或る點に於ては、夫等の諸書と連絡を保ちてやゝ細密なることを説かんもよろしかるべし。と信じて、その方針を以て叙述の順序を定めて本講義をば爲したりき。されば、本書の讀者はまた前記の文法書に依りて既に文法の大要を修めたるものたらんことを豫期するなり。

一本書の繁簡錯綜せるは叙述の方針の前記の如くなりし結果な

り。
 一本書の叙述の順序は前記の如き方針を以て定めたりしものなるが故に、本書は近頃予の出版せしめたる新式日本文法上巻には、叙述の順序の上に於ては、全く關係なし。

明治三十三年四月

岡田正美識

日本文法 文章法大要目次

序論	一
文の定義	七
文の成分	十三
主部	十三
説述部	十三
補足部	十九
文の成分	二十一
對部	二十二
補部	二十三
客部	二十五
自動詞・他動詞の別	二十七
動詞の他の分類法	三十六
文の成分	四十一

副部	四十二
提部	四十二
獨立部	四十三
雜例	四十三
文の成分	五十一
添加語	五十四
主語	五十八
補語	五十八
對語	五十八
客語	五十八
說述語	五十八
文の成分	六十七
言	六十七
句	六十八
文	六十九
章	六十九

雜例	七十一
文の種類	七十九
單文	七十九
續文	八十
複文	八十一
省約文	八十三
雜例	八十八
文の種類	九十一
敘述文	九十二
疑問文	九十二
命令文	九十三
咏嘆文	九十三
文の他の分類法	九十八
正序法・顛倒法	百三
省略法	百十二

並列法・並續法……………百十五
 換言法・對語法・疊語法……………百十八
 添詞法……………百二十二
 副詞法……………百二十六
 懸詞法……………百二十九
 序語法……………百三十一
 係結法・轉結法……………百三十四
 複雜なる係結の例……………百四十二
 係詞・結詞の表……………百五十
 係結の規定……………百五十一
 轉結の例……………百五十三
 呼應法……………百五十七
 時の呼應……………百五十八
 肯定・否定の呼應……………百六十

疑念の呼應……………百六十二
 尋問の呼應……………百六十八
 反語の呼應……………百六十九
 推量・想像の呼應……………百七十
 希望の呼應……………百七十一
 禁止の呼應……………百七十一
 假設の呼應……………百七十二
 當然の呼應……………百七十二
 同主……………百七十四
 同相……………百七十六

日本
文法
文章法大要目次終

日本
文法
文章法大要

岡田正美 著

序論

序論

世人の文法を學ぶものを見るに、或は文章を巧に書かんと
して學ぶものあり、或は書物をよみてそをよく了解せんが
爲めに學ぶものあり。されども、文法に於ては、文章を巧にか
くことをば教へずして、文章を正確に書かんことを教ふる
あり。文章を巧に書くことを教ふるは修辭學の範圍にして、
文法のすべきことにあらず。文法を學びて書物をよく了解
せんとするは外國語を學ぶ人には或は至當のこゝなるべ
けれども、我國人にして我國の文法を學びて我國の書物を

よく了解せんとするは決して文法を學ぶ唯一の目的には
あらざるなり。

文法は文章にあらはれたる言語上の一種の規にして、文典
は即ち之を順序よく書きあらはしたるものなり。故に、一國
の文典を學べば、その國の國文の性質を理解することを得、
従て、その國の國文を正しく書くことを得、又、その國文を容
易に了解することを得るなり。この國文を正しく書くこと
を得、又、その國文を容易に了解することを得るは、之は文典
を學びたる間接の利益にして、直接の利益にはあらざるな
り。

文法は、かくの如く、文章にあらはれたる言語上の或る一種
のきまりを順序よく記載したるものあるが、國文は時代に
つれて變遷するものなるが故に、文法にも亦同じく變遷あ

るべきなり。例へば、古代の祝詞、宣命の如き文よりして、平安
朝時代の土佐日記、枕艸紙、源氏物語の文の如くに變じ、更に
保元平治物語、源平盛衰記の文となり、東鑑となり、徳川時代
の和漢混和の文となり、夫より、遂に當今の文となりしにて、
國文はかく常に變遷してやまざるものなれば、文法も亦其
變遷につれて變化するが當然なり。即ち、奈良朝には奈良朝
の文法あり、平安時代には平安時代の文法あり、鎌倉足利徳
川の各時代にも亦それぞれその文法あるべきなり。今一二の
例を擧げて、其變化をいはん。

哉は、古はかかもご用ゐしが、後、かなとなり、今日にては
かなアといふに至れり。

な……そは、古は雲なたなひきの如くに用ゐしが、後
にはそを加へて雲なたなひきそご用ゐるに至り、又、變

じて雲たなびくなごなれり。

こそは古は、衣こそ二重もよきご用ゐて、上にこそのかかりこそばありても第五活用にて結ばざりしが、後にはこそよりかゝれば必ず第五活用にて衣こそ二重もよけれごやうに結ぶに至れり。

(此他なほあれども略す)

かくの如く、國文は變遷してやまざるものなれば、文法もこれに従ひて變化す。當今普通に行はるゝ文法は重に中古の平安朝時代の文章にあらはれたる規則をかきあらはしたるものなり。

文法には、又、一の方言の文法と他の方言の文法と、例へば朝鮮の文法と日本の文法とを比較して説く比較文法といふものあり、又、文法の時代によりて變遷したるを比較して説

きたる歴史文法といふものあり、其他、理論のみを説きたる理論文法、實用を主としたる實用文法、等ありて、その種類甚だ多し。

當今普通に行はるゝ國文法は、多くは、初に音韻のここをのべ、それより文字にうつり、假名遣にうつり、進みて品詞篇となり、終りに文章篇となる。これらの諸篇は文法には必要にして欠くべからざるには相違なけれども、文法の主眼とすべきものは音韻のここにあらず、假名遣のここにもあらず、將又、品詞のここにもあらずして、文章のここなり。余が今より説かんごするは實にこの文章のここにつきての大要なり。

◎文の定義

文の定義

文は完全なる思想を言語にあらはしたるものを更に文字にうつし出したるものなり。即ち、文は或る規定の下に或る詞の連続したるものにして、完全なる思想をあらはせるものなり。されば、詞はいかによく連続したりとも、完全なる意義をあらはさざるものは文にあらず。意義や、完全にはあらはれたりとも、詞の連続上に不都合なるところあらばこれまた文にはあらざるべきなり。

さて、
鳥が飛ぶ。

かくあれば、意義も完全に、詞の連続方も正當なり。されども
鳥が降る。

かくありては、詞の連続方は正當なれども、その意義は不完全にして、

雨が降る。

かくするときは、詞の連続方正當にして、意義も亦完全なる。さて、之を

降る。

かくするときは、意義はまた不完全となり、又、全體の形に於ても、前のに比して、足らぬところあるが如くなる。

雨が。

かくても、なほ意義不完全に、又、全體の形も不完全なるが如し。

ああ。

おや。

完備文

此等は、前の「降る」「雨が」などに比すれば、意義や、完全なれども、なほ前の「鳥が飛ぶ」「雨が降る」などに比すれば、尙不完全なるを免れず、又、形に於ても、夫等とは大に異なるところあるが如し。

さて、前にあげたる

鳥が飛ぶ。

鳥が降る。

雨が降る。

降る。

雨が。

ああ。

おや。

の類をば、形の上より名づけて **完備文** といひ、

不完備文

の類をば形の上より名づけて**不完備文**といふ。

又、

鳥が飛ぶ。

雨が降る。

完全文

の類をば意義の上より名づけて**完全文**といひ、

鳥が降る。

降る。

雨が。

ああ。

おや。

不完全文

の類をば意義の上より名づけて**不完全文**といふ。

されば、

雨が。

文

降る。

は不完備文にして、**不完全文**なり、

鳥が降る。

は完備文にして、**不完全文**なり。

鳥が飛ぶ。

雨が降る。

は完備文にして、**完全文**なり。さきに定義を與へたりし文は實にこの完備文にして**完全文**たる文のこゝなりしあり。

されば、文の定義は左の如く變更するこゝをも得べし。

文。

ある詞の連続したるものにして、その形に於ては完備に、その意義に於ては**完全**にあるもの之を**文**といふ。

(補)

不完備文 完全文 不完全文

「ああ」「おや」「すはや」の類は、普通の文典にては、皆「かな」「かも」等と同類と見做して、感動詞としたり。されども、そは非なり。

「ああ」「おや」「すはや」の類は、その意義「かな」「かも」の類文は、「雨が降る」「鳥が飛ぶ」の類に比して大に明白なり、されども、「雨が降る」「鳥が飛ぶ」の類に比しては尙ほ甚だ漠然たり。

予は「雨が降る」「鳥が飛ぶ」の類を言語といふに對して「ああ」「おや」「すはや」の類を感動語といふ。されば「雨が降る」「鳥が飛ぶ」の類を文といふに對しては、「ああ」「おや」「すはや」の類は、感動文ともいはゞ、いふべし。

◎文の成分

主部

説述部

文の成分

主部 説述部 補足部

父子に財産を譲る。

かくの如き文章に於ては、「父」があることをなしたるを見て、其事を文章にかきたるものなれば、「父」をこの文章の**主部**といふ。

「父」がなしたることは、子に財産を譲る、といふことなれば、子に財産を譲るをこの文章の**説述部**といふ。

苟も一篇の文章たる以上は、長くとも、短くとも、必ずこの**主部**と**説述部**を備へざるべからず。前に文の完備不完備といひしは、全くこの二部につきていひしものにして、前例の「鳥飛ぶ」「鳥ふる」「雨ふる」等は皆この二部を備へたるなり。この**主部****説述部**は時として省かるゝことあり。

私主部 只今學校に参ります。

(我)主部 明日は上野に行くべし。

前者は主部と説述部とを備へたれども、後者は主部を欠きたり。或人は或文典に「はいふテニ」ハは主格を示すテニナハあり。「とあるを信じて、この文に於ては、明日は「はいふが主部なり。「はいふ人もあらん。されど、そは大なる誤なり。この「明日は「はいふは唯その時間をいひたるのみの詞にして、主部として我、彼、汝等の類の省略せられたるが上にあるべきなり。かく主部の省略せらるゝことは今の西洋語には、命令文に於ける外は、決してあきこころにして、もし一文にして主部の欠けたるごきは、その文は文にあらずとす。唯ラテン語ギリシヤ語等古の西洋語に於ては、我國語に於けるご等し

く、或る主部は省略せらるゝが寧ろ常にして、其主部は夫れなくごも差支なきは勿論、場合によりては、その主部の存するが爲めに、却りて別趣の意味に轉することあるなり。洋語に於ける例はごもかくも、或る種の主部を省略することには、實に我日本の言語文章の一特色なり。

又、時として、説述部又は説述部の一部の省かるゝごあり。

左の諸例につきて見よ。

三人集まれば文珠の智主部 (あり)説述部。

春は花主部 (がおもしろし)説述部 秋は月主部 (がれもしろし)説述部。

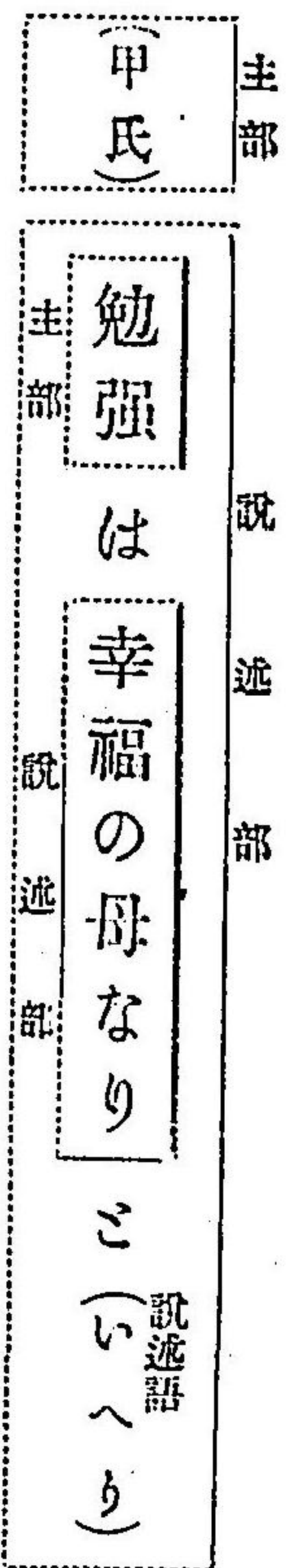
昔は昔主部 (なり)説述部 今は今主部 (なり)説述部。

此等の外、又主部と説述部との兩部に省略したるものゝあ

るここあり。

勉強は幸福の母なりと。

の如し。この文に於ては、勉強は「より」幸福の母なり「まで」は一の文にして、勉強は主部なり、幸福の母なりは説述部なり。さて、勉強の上の其事をいひ文は、語りたる人、即ち主部が省略してあるあり。而して、「こ」の下にはまたその人のいひ文は、語りたる動作を確に定めていひあらはす語、即ち説述語といふものが省略してあるあり。即ち、



の如く、もとはあるなり。なほ、

明日は降雨あるべしと。

人生僅に五十年とや。

帝國議會は来る十六日開會せらるべしと。

此等も皆同じ例なり。右のに準へて知るべし。さて、

子供が 遊ぶ。

之は之にて意義完全なり。

子供が 讀む。

之は之にては意義完全ならず。子供の讀むものを定めていひ加へざるべからず。

子供が 讀本を 讀む。

之にて意義は完全になるなり。又、

母が 呼ぶ。

之は之にては意義不完全なり。母の呼ぶものをあらはさるべからず。

母が 子供を 呼ぶ。

之にて意義は完全になるなり。

(某氏) 此學校の名を いふ。

之は之にては、或る一方よりいへば意義完全なれども、亦一方よりいへば意義完全ならず。

(某氏) 此學校の名を 常盤學校と いふ。

之にて意義は完全になるなり。

又、

老人 歩む。

之は之にても不完全にはあらず。しかし、之にてはなほ不足にて、

補足部

老人 道を 歩む。

之にて意義完全になる場合もあるべし。

さて、此等の場合に於て、「讀本」「子供」「常盤學校」「道」の類を總括して各の文に於ける**補足部**といふ。意は「文に不足の處ありて十分ならざるを補足して十分ならしむるもの」、この

義なり。大槻氏の廣日本文典には之を客語といへり、又他の本には賓辭とせるもあり。

子供が 遊ぶ。

之は之にて意義完全なる故に、別に補足部を要せず。されども、なほ之を不完全なりとして、更に、その遊ぶ場所を要す、とする場合には、例へば、

子供が 庭で 遊ぶ。

此の如き場合には「庭」を補足部として可なり。

子供が 寝る。

此の如き場合にも補足部は不用なり。

以上説くところによりて、

文は主部と説述部とより成る

ことを知るべし。而して、その

説述部中には補足部の在ることあり又なきことある

ことを知るべし。

(補)

大槻氏の廣日本文典を初めとして、普通の文典は、大抵文章を主部(予のいふ主部)と客部(予のいふ補足部)と説明部(予のいふ説述部)より予のいふ補足部を除き去したる殘餘(この三部分より成る)とす。文章によりて、客部の全くなきことあり、又、その二個以上あるこ

ともあるは、勿論のことなり。即ち、

子供、本を讀む。

父、子に財産を讓る。

を

子供

本を讀む

父

子に財産を讓る

こせずして、

子供

本を

讀む

父

子に

財産を

讓る

とす。

されども、之は我國語の本性に違ひ、又論理學の説く

ところにも戻りて、非なり。須らく、予が右に説きたるが如く、客部と説明部とを合して、説述部といて、さて、文章は主部と説述部とより成る、と改正すべきものなり。

◎文の成分

文の成分

對部 補部 客部

附 自動詞 他動詞 動詞の分類

前回に於て、文には必ず主部と説述部とあること、并に、その説述部の中に補足部の場合によりてあり、場合によりてなきことを説きたり。今よりは、その補足部につきて説くべし。補足部には種々の種類あり。之はその實物の性質の相異なるによりて生ずるなり。

(注意) 補足部の類別は予が始めてなしたるものなるが故に、從來の他の文典につきてその説明を求めらるるも、勿論あるべき筈なし。誤解せられざらんことを望む。

甲 本をよむ。

子供が 讀本をよむ。

この本讀本の類を補部といふ。本讀本は何れも無生物な

り。
 甲 [乙] を 打つ。
 母 [子供] を よぶ。
 この [乙] [子供] の類を **對部** といふ。乙、子供は何れも生物なり。

甲 [乙] に [本] を 教ふ。

この文に於て、[乙] [本] とは性質を異にするが故に、固より同一の扱を爲しがたし。故に、[乙] をば對部といひ、[本] をば補部といふ。従來の諸文典にては、此二種を共に客語又は賓辭といひて、その間に差別をつけず。されども、夫は西洋流にして、我國流にあらず。

その故如何といふに、此客語又は賓辭といふは皆西洋文典に Object とあるを譯したるものにして、西洋にては、如

何にも、この [乙] [本] とに差別をつけずして同一に取扱ふ例へば、

甲 reads a book.

甲 strikes 乙.

この二の文に於て、甲は主部、book は乙は客語、即ち Object なり。この主客を轉倒するときは

A book is read by 甲.

乙 is struck by 甲.

となりて、而して、この場合に於ても正當の文たることを失はざるなり。されば、book は乙とに差別を置く必要なく、兩者を同一に視て可なり。

あかれども、我文法にては然るべからず。試に前例を轉倒して、而してその西洋文法に於けるが如く正當の文たる

ここを失はざるか否かを檢せよ。
 本が甲によまる。
 乙が甲にうたる。
 後者は差支なし。前者は如何あらん。勿論その意義のこれぬといふことはなければ、かく形を換ふれば、寧ろ別の意義(甲ニハ本が讀メル(讀ミ得ラレル)の意味)となる。是れ我國に於ては、甲ニハ此本が讀ミ得ラレルの意義に於て「甲に本がよまる」本が甲によまる「といふこと普通にして「A book is read by 甲」の意義に於て「本が甲に讀まる」といふことは西洋の書物をよみし人の外は一般の人は解すること能はざるべく、從て使用することもなかるべきあり。即ち、我國流にては「乙」本とは決して同一視すべからざることを知るべし。

甲 落花を 雪に見る。

甲は 名を 甲太郎といふ。

この「雪」「甲太郎」の類を**客部**といふ。この客部といふ名は從來の諸文典に用ゐたる客語とは全く別物なり。彼是を混同することなから。

右にて、對部、補部、客部の大略は了解せられたるべし。今、夫等の定義を與へん。

對部

思想の主たる事物の爲す動作に關係する事物にして、その動作を受くる資格を有して、その動作を受くるものを思想の對部といふ。

動作を受くる資格なきものは動作を受くること能はず。故に對部たること能はず。

補部

思想の主たる事物の爲す動作に關係する事物

客部

客部

にして、その動作を受くる資格なきものを思想の補部といふ。

客部。こいふニテハにてうけたる補足部の内の一にして、補部にもあらず、對部にもあらざるものあり。之を客部といふ。

降る雪を 落花と 見る。

我、友人を 愚人と 呼ぶ。

の落花愚人の如き是なり。

(補)

對部、補部の定義並に、解説は右の如し。されども、諸君は、是によりて、一の場合に於て對部たりしもの又は、補部たりしものは、他の場合に於ても常に必ず對部

客部

たり又は、補部たるものと推定すべからず。一の場合に於て生物として取扱はれたるものが他の場合に於ては無生物として取扱はるゝことあり、又之に反對に、一の場合に於て無生物として取扱はれたるものが他の場合に於ては生物として取扱はるゝことあり。要するに、談話者又は記述者が生物として取扱ふ場合に於ては、生物にても無生物にても、凡て皆對部となり得べく、談話者又は記述者が無生物として取扱ふ場合に於ては、生物にても對部となり得ざるものご知るべし。即ち、補足部となり居る事物が對部なるか、補部なるかは、一に談話者又は記述者の之に對する考方によりて定まるものご知るべし。

(注意)

英語にても boys, lady's, soldiers, uncles, などは普通にいふが a tree's, waters, the mountains, a paper's, the sky's, などは普通にはいはず、普通には of a tree, of water, of the mountain, of a paper, of the sky などいふをも参考すべし。

以上説きしが如く、補足部には補部對部客部の三種あるなり。

補部と對部との大略は右にてほゞ了解せられたるなるべし、されども、その詳細にわたりて十分に會得せんには之と共に所謂動詞の自他を十分に會得せざるべからず。

動詞の自他

所謂動詞の自他は從來の諸文典の説くところ皆曖昧にして、諸君の明に會得したりと思惟せらるゝものも随分如何しきものなり、と思ふが故に、暫く轉じて動詞の自他につきて説くべし。

自他といふ語の由來に二あり。一は我國流にて、所謂自から然る、自から然する、自から然る等の自と他に然する、他に然せらるゝ、他に然せさする等の他とこの自他なり。一は西洋流の自動と他動との自他にして、彼の transitive verb を譯して自動詞といひ、transitive verb を譯して他動詞といふ、その自他なり。近來多く行はるゝ文典にいふ自他は皆右の第二の自他、即ち西洋流の自他なり。

今英文を例として、之を説くべし。その如何なる點まで

動詞の自他

が我國語に適し、如何なる點よりが我國語に適せざるかに注意すべし。

The man killed a snake.

The man sleeps.

前者に於ける killed を transitive verb (普通に譯して他動詞)と、いひ、後者に於ける sleeps を Intransitive verb (普通に譯して自動詞)と、いふ。

自動詞と他動詞とは通常語形異なれども、中には同一のものもあり。

He stops here.

He stops me.

School opens at 10 o'clock.

He opens the door.

の stops, opens の如し。

英文法にては總ての動詞をかく自動詞・他動詞の二に區別す。さて、此區別は transitive・intransitive の意義の上よりするが正當なれども、普通には寧ろ文の形の上より區別するなり。即ち、

The man killed a snake.

He stops me.

He strikes a boy.

He opens the door.

の如く、動詞の次に直に目的 (Object) の來る動詞をば、他動詞と、いひ、

The man sleeps.

He stops here.

西洋の他動詞

西洋の自動詞

School opens at 10 o'clock.
He calls on him.
の如く、動詞の次に目的の來らざる若くは動詞の次に前置詞來りて、さて次に目的の來る動詞をば自動詞といふなり。

右は動詞の目的の有無并に、その目的の動詞に對する位置の上より自動他動の差をいひたるものなるが、なほ文の轉換の上よりもその差異をいひ得。

茲に文の轉換といふは、甲の文の主を乙の文の目的(客)とし、甲の文の目的(客)を乙の文の主として、即ち甲の文の主客を轉換して、新に乙の文を作ることなり。そは、

The man killed a snake.

文の轉換

He stops me.

He strikes a boy.

の如き他動詞のある文にては、主客を轉換して

A snake was killed by the man.

I am stopped by him.

A boy is struck by him.

の如き文を作ることを得べし。

かく主客を轉換する爲めに、働掛の文の受身の文に轉ずることは固よりのことにして、いふまでもなきことなり。ことにては働掛の文を受身の文に轉じ得るか否かといふが所要の問題にて、その變化の如きは毫も問ふ必要なきなり。然るに、

The man sleeps.
 He stops here.
 School opens at 10 o'clock.

の如き自動詞のある文に於ては、目的なきが故に、到底主客を轉換して他の文を作ることも能はざるなり。是亦實に自動他動の主要なる差異點なり。右二點を以て自動他動の區別の標準として、さて、翻て我動詞を檢せよ。實際に於ていかなる狀を現じ來るべきか。我國の文法にては、テニヲハといふものは悉くその上に來る名詞をしてその下に來る動詞の目的たらしむるものにあらず。されば、いづれが目的にして、いづれが目的をあらざるか、は形の上よりは區別しがたし。

小兒、犬を打つ。
 子供、本をよむ。
 鳥が空をかける。
 犬が道の端を行く。
 老人空しく一日をすごす。
 此等の「犬、本、空、道の端、一日」の内、いづれがそれそれの動詞の目的にして、いづれが目的ならざるか、見渡したるところにては全く判別しがたく、又、
 母、子供に菓子を與ふ。
 子、母に肖る。
 子、母に抱かる。
 老人、机に向ふ。
 老婆、病にかゝる。

人々、花見に行く。

此等の「子供、母、机、病、花見」のいづれが夫々の動詞の目的にて、いづれが目的ならざるか、是亦見渡したるころにては全く判別しがたし。

されば、我國の文章にては、英文に於けるが如く、目的の有無よりして動詞の自他を區別せんことは全くなし。能はざることを知るべし。

目的の有無より區別すること能はず、ご定りたる以上は、予輩は動詞の意義の上より、又は右の主客轉換の上より、この區別を爲さざるべからず。而して、意義の上より區別せんとするに、西洋流の頭をもてる甲の人は、かく彼國の文法にひかれてその區別を西洋流にし、然らざる乙の人は又自己の考によりてごもかくも區別

動詞の分類法

して、兩者の間に一定の標準のあることなし。此故に、兩者の區別區々にして、學ぶ者はそのいづれに従ふべきかに迷ふ。されば、この意義の上より自他を區別せんごも今は殆んどあし能はざることを知るべし。
まかれば、動詞の自他を區別せんはたゞ文の轉換即ち主客轉換による外に途なきなり。
是によりて、余は専ら西洋文法を基礎として、若しくは、一語の意義の上よりして、動詞の自他を説く現今のあらゆる日本文典の著者より分れて別に新に我國の動詞の自他を説き試みんとす。
されども、今は之を詳説せん暇なし、たゞその大略をのべんに、(從來の諸文典に説くところご混同せんことを恐れて、名稱も亦全く別のものを用ゐる。)

單獨動詞

鳥 ぶ。

鐘 なる。

川 流る。

此の如く、説述部中に一の補足部もなくて、意義の完全せる場合には、此「ぶ」なる「流る」の類の動詞を **單獨**

動詞 といふ。

犬、道を走る。

子供、本を讀む。

教師、生徒を叱る。

痴人、夢を説く。

老人、松風を天地の音楽といふ。

此の如く、説述部中に一つ又は二つ以上の補足部ありて、意義の完全せる場合には、此「走る」「讀む」「叱る」「説く」

關係動詞

ふの類の動詞を **關係動詞** といふ。

右の「走る」は英語にては、或る場合に於ては自動詞なり、或る場合に於ては他動詞なり。「讀む」「叱る」「説く」「いふ」は英語にては皆他動詞なり。

又「走る」は「犬走る」の場合には、補足部なき故に、單獨動詞なり。又「飛ぶ」「流る」も、鳥が空を飛ぶ、「川が山間を流る」などいふ場合には、補足部ある故に、關係動詞なり。

されば、右の分類法は決して英文典にいふ自動詞、他動詞の分類法と同一ならず、又動詞を確定的に分類したるものにあらざることを知るべし。即ち、この分類法は場合々に應じて動詞を分類するものにして、極めて融通自在なるものなること

を會得しおくべし。

さて、又、

我 なく。

鳥 こぶ。

此の如く、動詞が單獨動詞にして、而して、其主部を
るものが生物ある場合には、此なく、こぶの類の動詞を

自己動詞 といふ。

鐘 鳴る。

川 流る。

此の如く、動詞が單獨動詞にして、しかして、その主部を
なれるものが、前の場合と異なりて、無生物なる場合に
於ては、此の「鳴る」「流る」の類の動詞を **自然動詞** とい

自己動詞

自然動詞

鐘の音きこゆ。

人の影見ゆ。

此の「きこゆ」「見ゆ」も亦等しく、單獨動詞なり、されども、此
の「きこゆ」「見ゆ」は前の「鳴る」「流る」は別に、又、前の
「なく」「こぶ」も別あり、又、鐘の音をきく、人の影を見る、
こは別の意義の文なるが故に、勿論「きく」「見る」も別
なり、かくの如きを稱して **反照動詞** といふ。この鐘
の音は自然に聞ゆるにて、人が聞かんとして、きくには
あらず、又、人の影見ゆるも、人が見んと欲して見るにあ
らずして、自然に見ゆるなり、而して、こは鐘と我と又は、
人と我とがありて、兩者の間に於て始めて成立つもの
なるが故に、反照動詞といふなり。

反照動詞

さて、又、

子供、本をよむ。

老人、松風を天地の音楽といふ。

犬、道を走る。

此の如く、動詞が關係動詞にして而して、其補足部が無生物なる場合即ち、補部なる場合には、その「よむ」「いふ」「走る」の類の動詞を、**係補對詞**といふ。

母子を抱く。

教師、生徒を叱る。

此の如く、動詞が關係動詞にして而して、その補足部が生物なる場合即ち、對部なる場合には、その「抱く」「叱る」の類の動詞を、**係對動詞**といふ。

係補動詞

係對動詞

右、自己動詞、自然動詞、反照動詞、係補動詞、係對動詞の内にて、凡ての點に於て、英文典にいふ他動詞に該當するものは、係對動詞一種のみなり。此係對動詞のある文に於てのみ、主客を轉換して、新に一文を作ることを得るなり。

母子を抱く。

子が母に抱かる。

教師、生徒を叱る。

生徒、教師に叱らる。

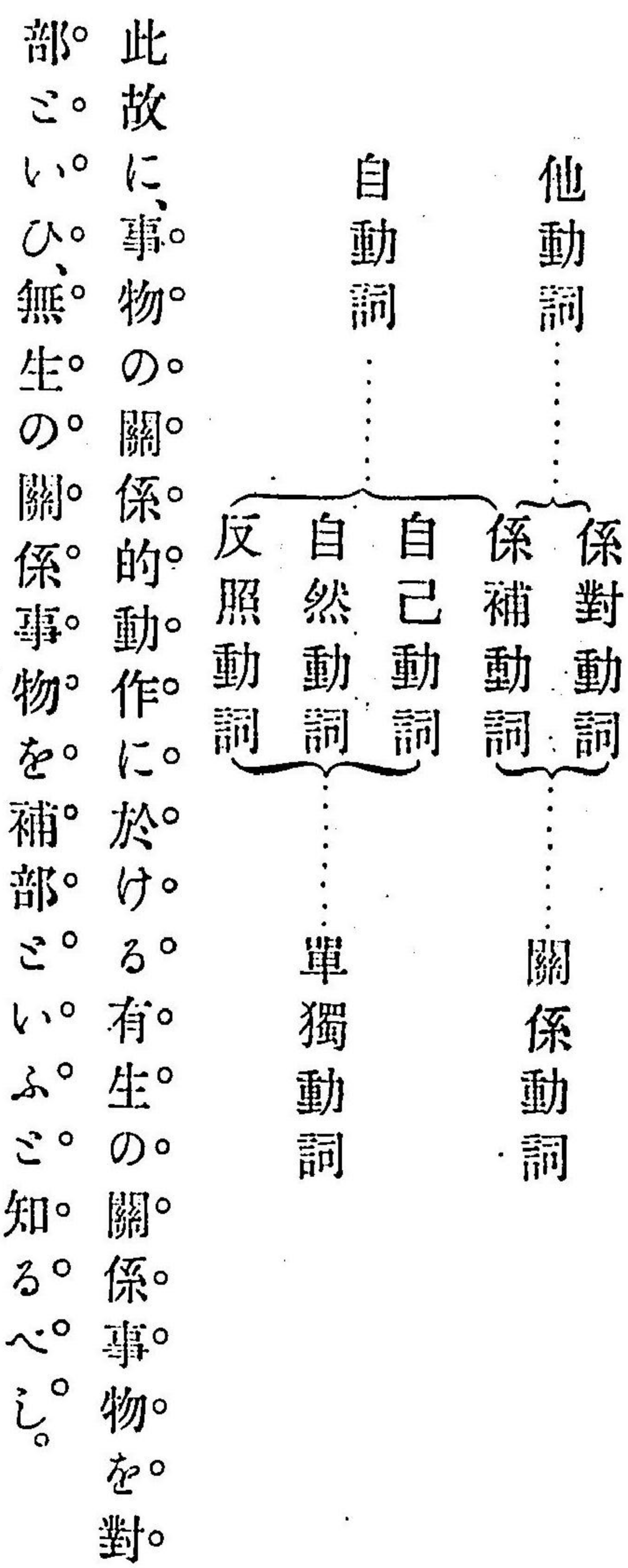
の如し

右動詞の二類五種の分類法を從來の自動詞、他動詞の分類法に比較すれば、左の如し。

新舊對照表

従來の分類

新しき分類



◎文の成分

文の成分

副部 提部 獨立部 附雜例

凡て文章には必ず主部と説述部とのあるべきことは既に前に述べしが如し。又、その説述部の中に補足部のあること、又、その補足部の中には對部、補部、客部等のあることも既に述べしが如し。

さて、文章中には、又、此等の外に、**副部**、**提部**、**獨立部**、**附雜例**の、あることあり。

昔、小野篁といふ人ありけり。

嵯峨帝の御時に、あるもの内裏に札を立てたりけるに、無惡善と書きたりけり。

一條院の御時、雪いとおもしろく降りたりける朝、帝は、し近くいで居させ給ひて雪御覽しけるに……

副部

四十一

副部

かくの如く、主部となりてある事物の動作をなし文は存在する場所又は時をいひあらはしたる部分を**副部**といふなり。

不忍池詩人之を小西湖といふ。

林子平高山彦九郎蒲生君平、此三奇士を君は知れりや。

土手に上る者は、官乏ヲ違警罪に處すべし。

上州は利根郡川場村で御座います。

かくの如く、特別の必要ありて、補部に相當するものを最初に提げ出すことあり、かく提げ出したる事物をいひあらはしたる部分を**提部**といふなり。

君、此三奇士を知れりや。

嗚呼、月、今宵の月、今宵の月の清くすみたるよ。

汝、過すな。

獨立部

かくの如く、主部に相當するものを特に取出していひ、又は呼掛けていふことあり、かくいひだし、又は呼掛けたるものをいひあらはしたる部分を**獨立部**といふ。

以上述べたるところによりて、文の諸部は略了解せられたるならん。今、次に、例を舉げて諸君の考を一層明になさん。

(字の側に「補」「對」「客」「副」「提」「獨」などの字を記入せるは補部、對部、客部、副部、提部、獨立部の部の字を省きたるなり。)

我 犬^對を 打つ。

我 之^補を 汝^對に 語らん。

老人 新聞^補を よむ。

船頭 舟^補を こぐ。

雜例

遊び 天副に かける。
 松風補を 琴客の音客ききく。
 さきみだれたる櫻補を おりゐる雲客を 見たり。
 稻補を植補うる女客を 早乙女客を いふ。
 よに人鬼客はなしききく。
 我は明日客より大客に勉強せんご 決心したり。
 忠臣は孝子客の門客に出づご がや。
 我思ふ人客はありやなしやご 都鳥野に こごはん。
 其補よし いさゝか 物補にかきつく。
 ふかき心補を 君補に見るかな。
 若菜補籠補に入れ、 きじなご 花補につけたり。

かばね補を 山野補に さらさば、 さらせ。 浮名補を
 西海補のなみに ながさば、 ながせ。
 後徳太寺の實貞卿は 八月十日副あまりに 福原補より
 ぞ のぼりたまふ。
 正なうも 敵野に 後補を 見せたまふものかな。
 甲補を 郎等野に もたす。
 高松殿補に おしよせ、 三方補に 火補を かけ、
 一方補にて さゝへ候はん。
 行幸補を この御所補に なしたてまつり 君野を
 御位補につけまらせん。
 兼平一人野をば よのもの千騎萬騎客ごも 思しめし候

ふべし。
 義光 笙はありや客 時秋に對さひければ……
 ドーマス先生 生徒に對 ボート補(boat)を ボウト客に
 教へたり。

きりぎりす、いたくな鳴きそ。

山高み見つ提、我こし櫻花、風は心にまかすべらなり。
 あすよりは、しがの花提その、まれにだにたれかはこはん、
 春の山里。

見る人、涙を流さぬはあかりけり。

よしの川提、岸の山吹吹く風にそこのがけさへうつろ
 ひにけり。

春たて提花もにほはぬ山里は、ものうかるねに鶯の
 なく。

昔、大和國葛城郡に、夫婦のものありけり

之より副さきに、元献皇后、武淑妃など聞え給ひし、后世に
 双なく御志深くおはましき。

異朝副には、その類なし。

世副には、心得ぬここの多きなり。

春かすみたなびく山の櫻花、うつろはんさやいろか
 はりゆく。

白雲のたつ田提の山の八重櫻、いつれを花さわきて折
 らまし。

梅が香にむかしをこへば、春の月、答へぬかけそ袖にうつれる。

はなのいろはかすみにこめてみせずとも香をだにぬすめ。春の山風。

よそにみてかへらん人に、藤の花、はひまつはれよ、枝は折ることも。

ここしより春しりそむる櫻花、ちるこいふことはならはざらん。

夕月夜しほみちくらし。難波江のあしの若葉をこゆる白波。

よしの山花やさかりににほらふん。ふるさこさらぬ

峯の白雲。

櫻花ゆめか、うつゝか、しらくものたえてつれなき峰

の春風。

白河院の御時、天下殺生禁断せられければ、國土に魚鳥の類絶えにけり。

梅の花、たちよるばかりありしより人のこがむる香にぞしみける。

凡古言を解せんこ心がくる者、たれか五十音の反切によらずして釋し得られぬべき。

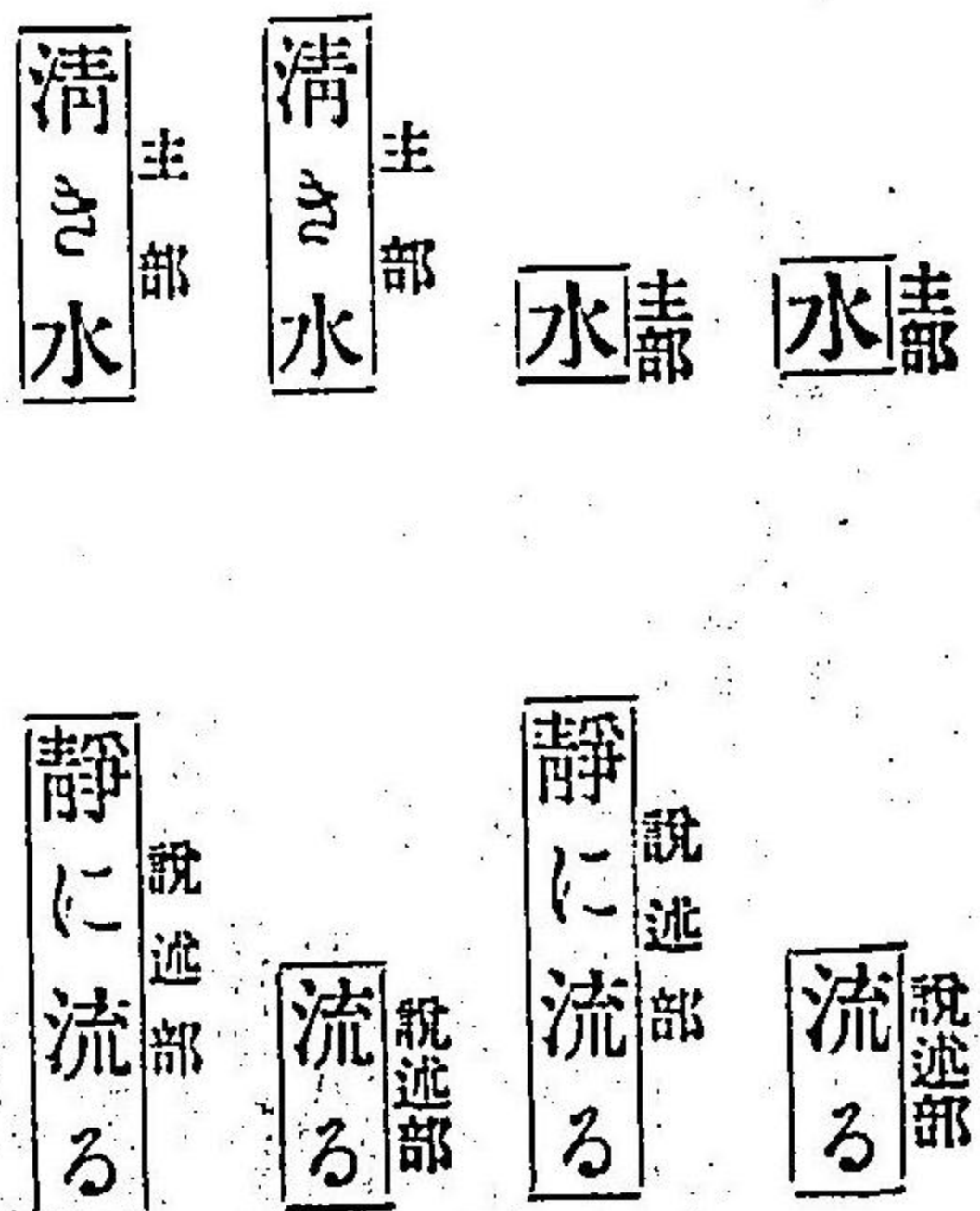
(二) 場所を示せり。西洋文法ならんには場所の副詞として扱ふべきものなり。之を今暫く補部の内に入れおく。

- (一) 女そのものをいひたるにはあらず、稻を植うるものをいひたるなり。されば此處にては無生物として扱ふ。
- (二) 物を示せり、見方によりては場所ともなる。西洋文法ならんには場所の副詞として扱ふべきものなり。
- (三) 無生物として扱ふ。君は場所とも物とも見らる。きじなどは無論物なり。
- (四) 方角を示せり。之も西洋文法ならんには方角の副詞として扱ふべきものなり。之も暫く補部の内に入れおく。
- (五) 歌にのみいひ得、特別なり。

●文の成分

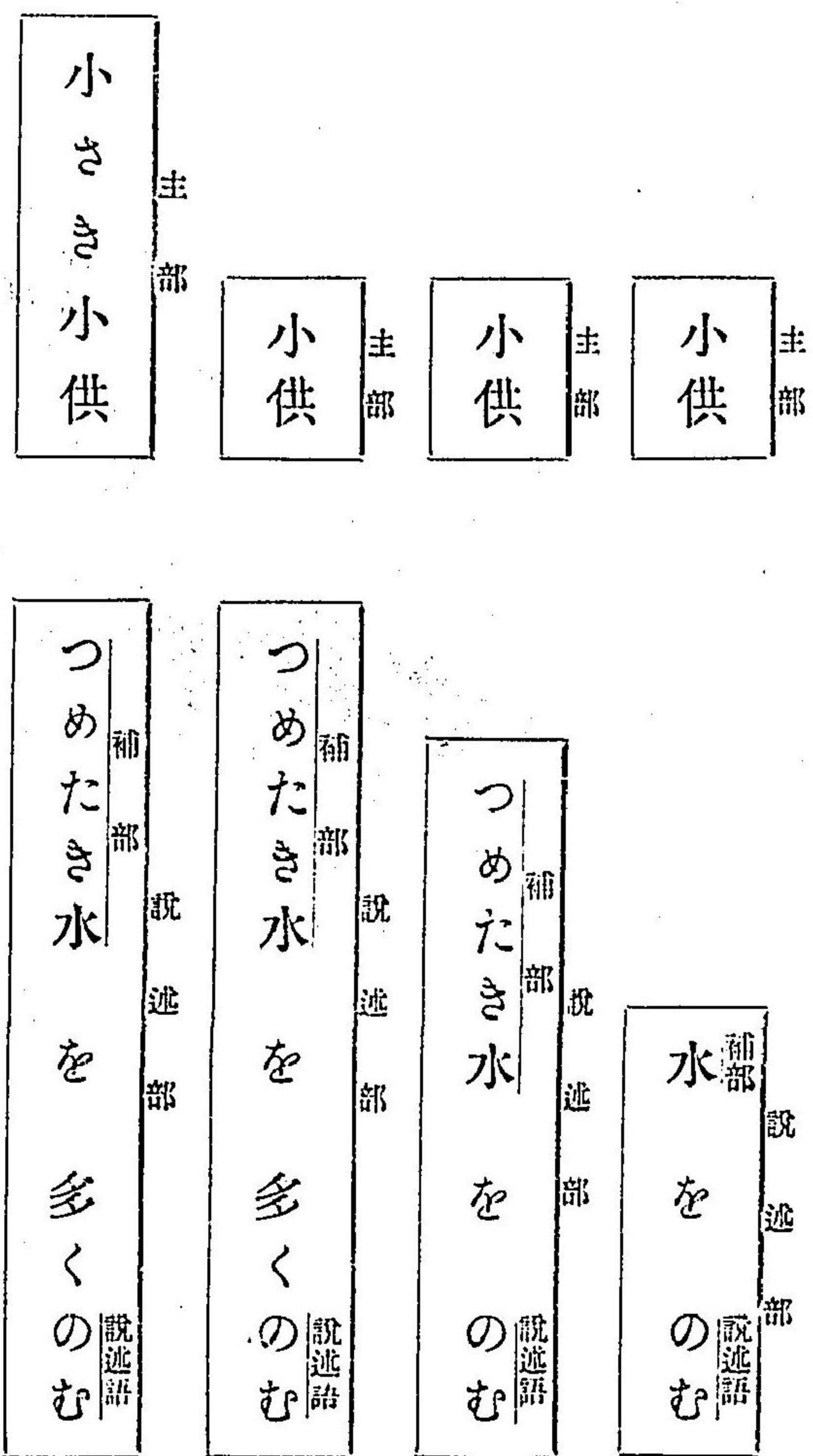
文の成分

添加語、主語、對語、補語、客語、說述語、附、添詞、副詞



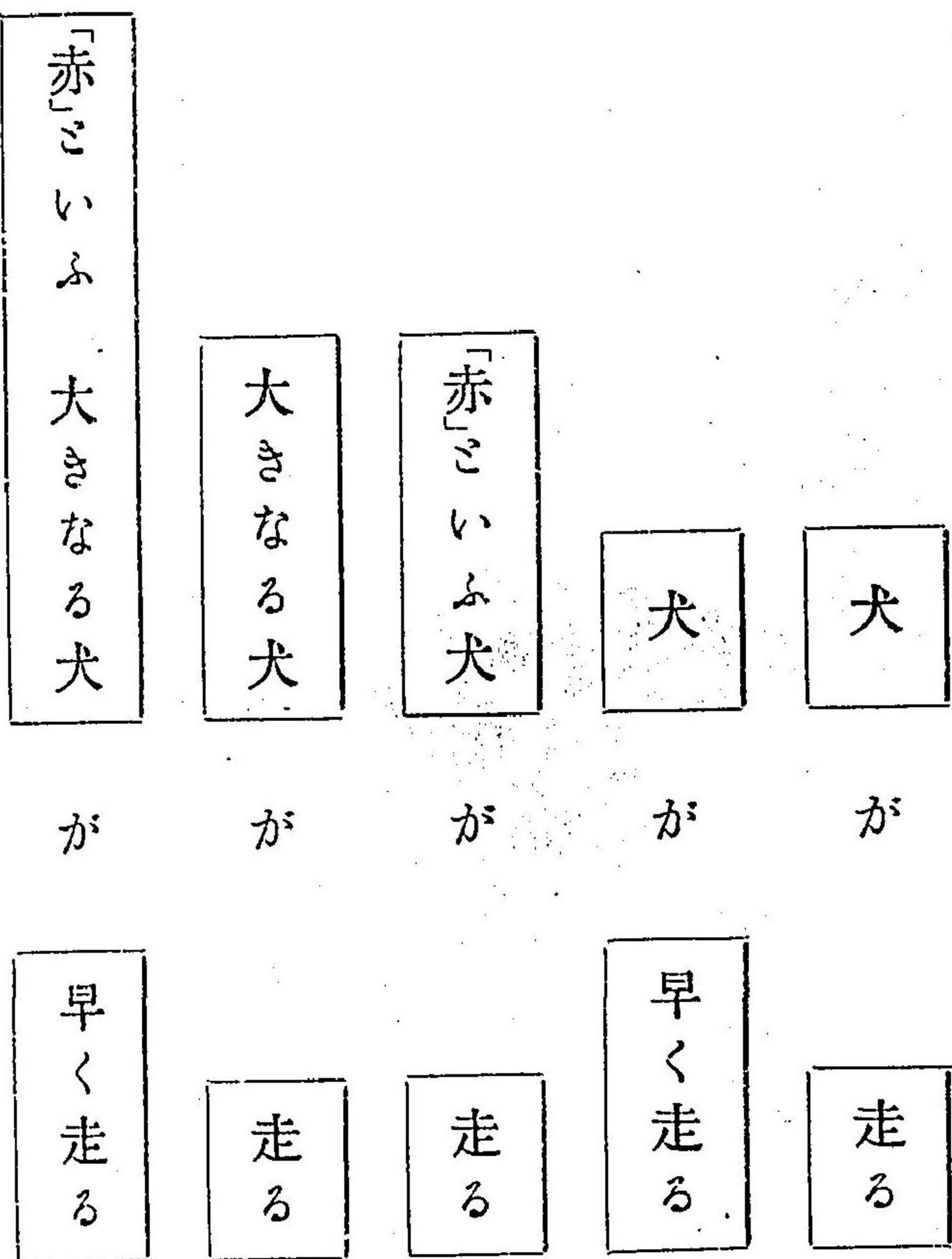
この四つの文章を比較するに、多少異なるところあり。第一と第二とを比すれば、第二の説述部は第一の説述部に「静に」といふ語の添はりたるものに等しく、第三と第一とを比すれば、第三の主部は第一の主部に「清き」といふ語の添はりたるものに等しく、第四と第一とを比すれば、第四の主部は第

一の主部に「清き」といふ語、第四の説述部は第一の説述部に「静に」といふ語の添はりたるに等し。



この四つの文も亦各相等しからず。第二の補部は第一の補部に「つめたき」といふ語の添はりたるに等しく、第三、第四も

その主部又は、説述部中に各添ひたる語ありて、四つとも相等しからず。



この四つの文章の異なるところは、前例を推して了解する
ことを得べし。

かくの如く、主部に添ひたる「清き」「小さき」「赤といふ」「大
なる」と補部に添ひたる「つめたき」と説述語に添ひたる「静
に」「多く」「早く」は如何なる性質のものなるか、と考ふるに、
「清き」「小さき」「赤といふ」「大きなる」「つめたき」等は夫々の事
物の有様をいひたるものにして、静に「多く」「早く」等は夫々
の動作の有様をいひあらはしたるものなり。かくの如き語
并に、此他或る二三種の語の類を總括して**添加語**(或は、修
飾語添飾語)といふ。

今左に添加語の添はりたるもの、例を擧げん。

~~~~~印は添加語にして、~~~~~印は被添加語なり  
美しき花

添加語

添加語の例

あつき日

小野道風は 字を よくかく。

まつさかさまに落ちて、あはや、谷底の鬼こ なら  
んさす。

この土堤に 上るべからず。

今日 は 極めて寒し。

祝ふ今日こそ たのしけれ。

忠義の狗 こそなるこそ、亂離の人 こそならじ。

山々の花 は さきたるなるべし。

ここしより春しりそむる櫻花、散るこいふことは習

はざらなん、

あさみどり花も一つにかすみつゝおぼろにみゆる

春の夜の月。

なにはえのあしのわかばをこゆる白波

我友人の家を はやくたつねたり。

向うの島につきて、いそぎで登山す。

新田義貞といふ人 相模の稲村の崎にて

腰に佩きたる大刀を 滔々たる海の中に投じた

り。

口髭いかめしき人 美麗なる車に 泰然とのりて、

はやく走らせたり。

束髪にいひたる娘 奇麗なる花を 斜にもちて、

愉快なる唱歌を おもしろく歌ひつゝ、 静に歩む。

みづはぐみたる老婆 かはゆらしき少年に いさま

しき昔話を 静に話す。

し。

以上説きたるところに依りて、予輩は茲に左の定義を得べ

おこなしき八重子は やさしき母に おもしろき花  
見に 度々伴はる。  
眉目秀美の少年 「プツシングツ、ゼフロント」といふ  
書物を 一貫張りの机に 正しくのせたり。  
赤き熟柿 高き枝より にはかに落ちたり。  
横町の五軒目の家の小さき白きかはゆらしき猫 が  
隣りの八兵衛の飼犬の黒に昨日も一度今朝も一度追  
ひかけられたり。

(注意)

~~~~~ の関係は、讀者の却て誤解せんことを恐れて  
普通の程度に止め置きたり、讀者なほ右以外の関係を研究
し見よ。

| 主語 | 補語 | 對語 | 客語 | 說述語 |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--|
| 主語の内に添加語のあるときその主部中より添 | 補部の中に添加語のあるときその補部中より添 | 對部の中に添加語のあるときその對部中より添 | 客部の中に添加語のあるときその客部中より添 | 說述語の中に補部對部客部又は他の添加語のあるときその說述部中より補部對部客部又は他の添加語を除きたる殘餘を說述語といふ。 |
| 前に引きたる | | | | |
| 水 | | | | |
| 流る。 | | | | |

の「水」は主部にして、主語なり。「流る」は說述部にして、說述語なり。

說述部、說述語は、共に略して述部、述語ともいふ。

清き水 靜に流る。

の「清き水」は主部にして、「清き」といふ添加語を去りたる殘餘の「水」は主語なり。「靜に流る」は說述部にして、「靜に」といふ添加語を去りたる殘餘の「流る」は說述語あり。

小さき子供 つめたき水 を 多くのむ。

の文に於て、主部の「小さき」を去りたる殘餘の「子供」は主語なり。補部の「つめたき」を去りたる殘餘の「水」は補語なり。說述部の「多く」を去りたる殘餘の「のむ」は說述語なり。

以上説きたるところを圖を以て示せば左の如し。

主語・對語・補語・客語・說述語

文の解剖圖



但、上下顛倒し、或は添はざるもあることはいふまでもなきことにして、何れの文も圖の如くなるにはあらず。さて、この主語對語補語客語說述語等には如何なる性質の詞がなり得るか、と考ふるに、

すべて人が考を起すには、世の中に種々の事物のあることを要す。世の中に種々の事物ありて、其事物によりて人は種々の考を起すものなれば、人の考の主なるものは常に事物なり。雨ありて、雨ふるといふ考も出で、花といふ物ありて、花がうつくしいといふ考も出づるなり。

さて、世人はその事物をよく區別して彼と此とを混同せざ

らんが爲に、其事物に各名稱をつけたり。その名稱を文法學者は總稱して名詞といふ。されば文章の主語は勿論對語補語客語には皆この名詞がなるなり。

說述語は事物の動作状態存在等をいひあらはすものなれば、この說述語となるべきものは主として動詞形容詞なり。

主語對語補語客語には名詞がなり、說述語には主として動詞形容詞がなる以上は、一括して添加語といふ内にも、實は二種の異りたる性質の添加語のあることを知るべし。即ち一は事物そのもの、状態數量等をいひあらはすもの、一は事物の動作状態存在の状态度量等をいひあらはすものなり。

この事物に添はるべき添加語、たとへばコップに添へていふこのこか、或は透明なるこか、いふ如き、凡て事物の有様性質

添詞

形状文は、數量等をいひあらはす語を添詞といふ。

故に主語對語補語客語の添加語は添詞なり。

これと異なりて、事物の動作状態存在の時處有様又は、度量等をいひあらはす語を副詞といふ。

故に、説述語の添加語は副詞なり。

又、副部も説述語の副詞となるなり。

文章中には諸部の添加語なく單純なることもあり、又は、數多の添加語の添はりて複雑なることもあり、單純なる場合には了解し易けれども、複雑なる場合には容易に了解せられざることあり、よく注意して、主語對語補語客語説述語并に、夫等に添ひたる添加語を甄別し、又、夫等の語の互に關係するところを究むべきなり。

副詞

◎文の成分

文の成分 言句文章

月 いでたり。

清き月 いでたり。

この二の文章に於て、前の文の主部は主語一語より成り、後の文の主部は添加語と主語との二語より成る。前の文の主部の如き單一なる語を言(Word)といひ、後の文の主部の如き連合したる語を句(Phrase)といふ。

試に、言及び句に定義を與ふれば、大凡左の如し。

言。一つの觀念をあらはす字又は、字の集合又は、音又は、

音の集合を言といふ。

即ち、一字又は、二個以上の字の集合又は、一音又は、二個以上の音の集合にして、一の觀念をあらはすものを言

言

言句

句

句。二個以上の言の連続体又は集合体にして言のあらはす観念よりも稍複雑なる一の観念をあらはすものを句といふ。

句は實に二個以上の言の集合なれども、文章中に於ては只一の言と同じき資格を有せるのみなり。

月 いてたり。

清き月 いてたり。

いと清き月 いてたり。

この三つの文に於て「清き月」「いと清き月」は最初の「月」と同じき資格を有して共に主部なり。

子供 水をのむ。

子供 つめたき水をのむ。

子供 いとつめたき水をのむ。

この三つの文章に於て「水」と「つめたき水」と「いとつめたき水」とは共に同資格にして共に補部あり。唯其句なると言なるこの別あるのみなり。

文の定義は前に既に述べたり。されども、なほ左の如くもいひ得べし。

文。言の集合にして、一のみごまりたる思想をあらはしたるものを文(Sentence)といふ。

章。文の獨立せざるものを章(Cause)といふ。

我、上野に行きたり。

我、上野に行きたるとき、某氏に逢ひたり。

この二つの文に於て、後の「我、上野に行きたる」は終の一文字が前者のりと異なり、且つ、意義に於ても、前者は獨

文 章

立。した。れ。ど。も。後。者。は。獨。立。せ。ず。か。く。そ。の。形。に。於。て。も。そ。の。意。義。に。於。て。も。文。と。異。な。り。て。一。文。と。し。て。獨。立。せ。ざ。る。も。の。を。章。と。い。ふ。あり。

こ。の。章。は。文。の。中。に。於。て。は。言。と。全。く。同。し。き。資。格。を。有。す。一。の。文。の。他。の。文。の。中。に。入。り。た。る。と。き。は。そ。を。只。一。個。の。名。詞。な。り。と。し。て。取。扱。ふ。

例へば、左の如し。

美しき畫あり。

小兒の牛に騎りたる畫あり。

孔子の名を丘といへり。

孔子も上智と下愚とは移らずといへり。

章は又節ともいふ

雜例

今左に種々の文に就いて、言句章文と文の部との關係の概要を示さん。

(主部言、主部章の如く記せるは言、又は章が主部となりたるを示すものなり。他は之に準へて知るべし。)

月主部言 述部言 清し。

鳥主部言 述部言 飛ぶ。

我は主部言 今日述部句は勉強せん。

そは主部言 よきこと述部句なり。

赤きは主部言 うつくし述部言。

「赤きは實は形容詞なれども、こゝにては其下にもものといふ語のはぶかれたるものなれば「赤きもの」の意として、名詞として取扱ふ。

遊主部、言ふは樂述部、言し。つ主部、言こむるは苦述部、言し。

この「遊ぶ」つとむるは共に動詞なれども、こゝにては其下に各ことといふ語の省かれたるものなれば「遊ぶこと」つとむることの意として取扱ふ。

う主部、句つくし述部、言き鳥述部、言なく。

か主部、句へる人述部、言あり。

ご主部、句し若主部、章き人の煙草をのむはよろ述部、言くからず

里人の薪主部、句を述部、言負述部、言ひたるが市中述部、句をうりあるく

梅か香主部、文にむかしを主部、文ごへば春の月こたへぬかげぞ袖に

う主部、句つれるは新古今和歌集述部、句に出でたる歌述部、言なり

小僧對部、言犬對部、言を打つ。

吾對部、言これを汝對部、言に語らん。

吾對部、言これを吾對部、句が最も親愛なる甲君對部、句に贈る。

花對部、句をのせて流對部、句を下る筏子對部、句に言對部、言こはん。

小供補部、言花補部、言を折る。

正成補部、言は忠臣補部、言なり。

我補部、言は東京補部、言に行く。

我補部、言これを汝補部、言に與へん。

再會 補部、言 いつをか 期すべき。

かれは 補部、言 苦しきを 忍びたり。

この歌は 補部、句 新古今集にいでたる歌 なり、

商人は 補部、句 利を得るを よろこぶ。

たれも 補部、章 おのれの人にすぐれたるを よろこぶ。

| | | | | | | | |
|---------------------|---|-------------------|-------|-------------------|-----|-------------------|------|
| <small>主部、言</small> | 我 | <small>主部</small> | 我思ふ人は | <small>主部</small> | 我 | <small>主部</small> | 我 |
| | こ | | は | | こ | | こ |
| | | | ありや | | なしや | | を |
| | | | | | | | 知らず。 |

花さき 主部、句 鳥なく 春の 空は 主部、句 いこのごかなり。

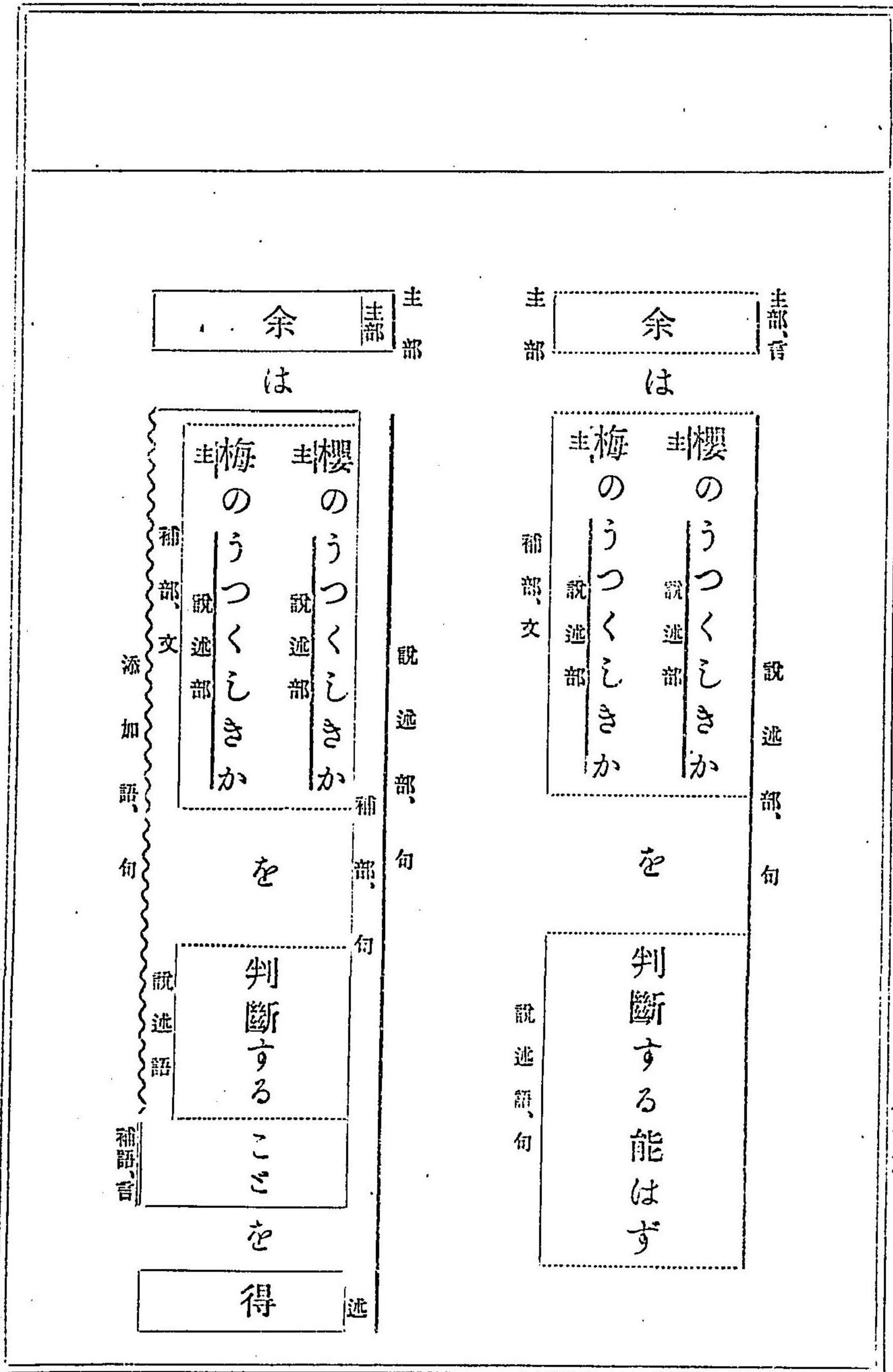
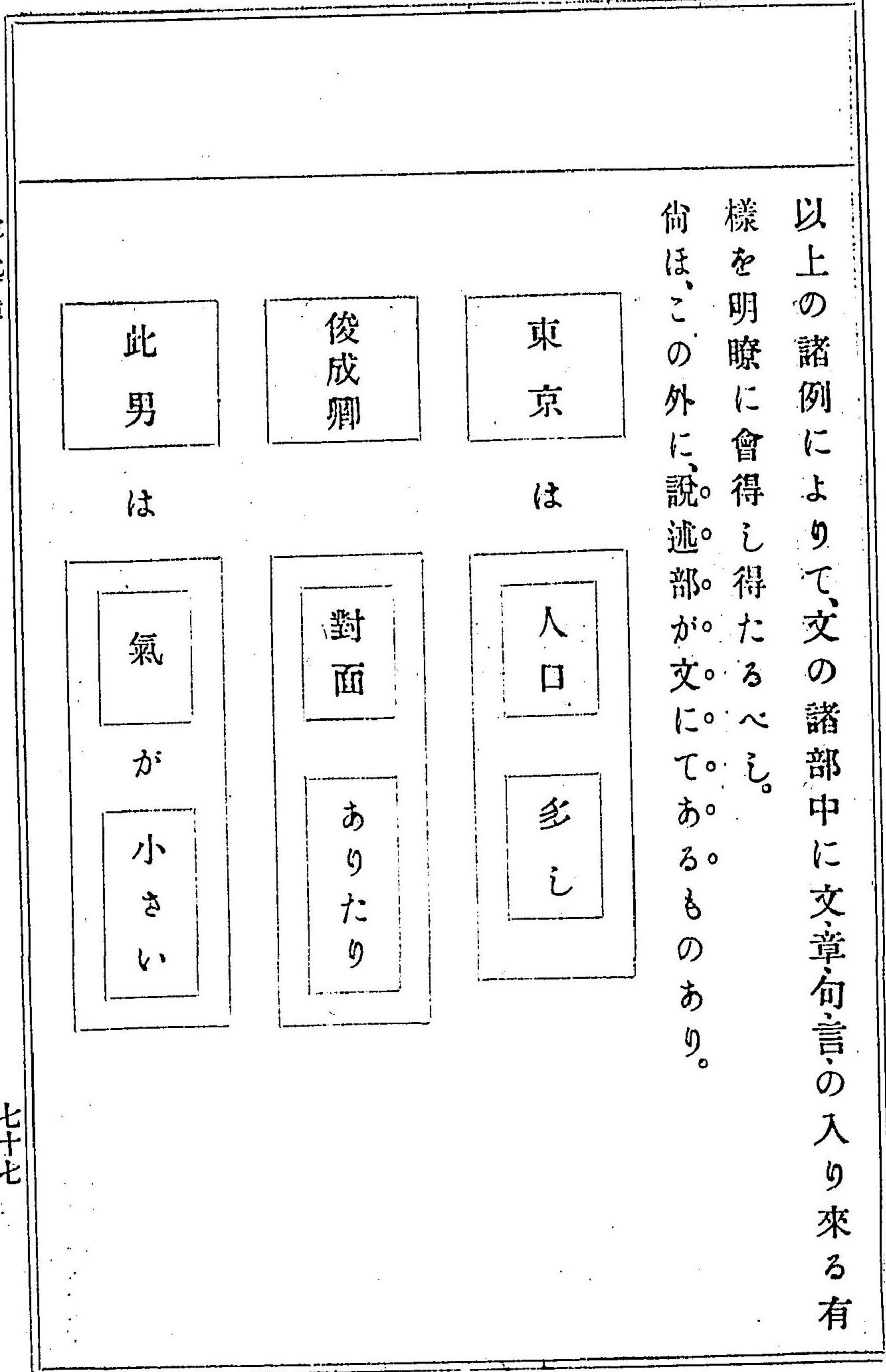
次郎 主部、言 は 主部、句 風の吹く日 副部、句 も 副部、句 雨のふる日 副部、句 も 副部、句 つとめて 副部、句 學校 補部、言

に 主部、言 行きたり。 副部、言

この文に於ては「つとめては」行きたりの添加語なり。「風の吹く」はここにては「日」の添加語なるが故に章なり。「雨の降る」も亦同じ。

大なる 補部、句 松 主部、言 に 主部、言 藤 主部、言 の 主部、言 かかりたる 副部、言 が 副部、言 池 副部、言 の 副部、言 中に 副部、言 あり 副部、言

義光 主部、言 筆 客部、文 は 客部、文 ありや 客部、文 こ 客部、文 時秋 對部、言 に 對部、言 こひけり 對部、言



の如し。この形の文は西洋文には例なけれど、我國文には甚だ多し。尙ほ左に數例を列舉せん。

日本人は髮の毛黒し。

予學淺く識せまし。

我琵琶の聲を聞いて、愁深し。

この藥はよき香がする。

聞く人ぞ涙は落つる。

官軍利あり。

お母さんは頼甲斐がない。

お前は之に氣がつかぬか。

君はこの歌が歌へるか。

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

此等の文の説述部は各主部説述部を具へて、純然たる文なり。されども、文全體より見れば、此等の文は尙ほその一部分にして文ごして獨立せるものにはあらざるが故に、此等の説述部は殊に説述章と稱ふ。

「大日本帝國は萬世一系の天皇云々の文は見方によりては

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

ともなる。説明の理由だに正しくば、何れにても可ならむ。

◎文の種類

文の種類

單文、續文、復文、省約文

前回に於て文の成分を説了へたり。よりて、これよりは、文の種類のことを説くべし。

鳥なく
圭 逃

單文

かくの如く、一つの主部と一つの説述部とより成る文を單

文といふ。

此處に一つの主部といへるは必ずしも單一の名詞又は一個の名詞の謂にはあらず、數個の名詞たりとも、それが連合又は集合して一團となれるものならば、夫等をも含むものを知るべし。
されども、此處にいふ一つの説述部は一個の説述語又

は。添。加。語。こ。一。個。の。説。述。語。こ。の。一。團。の。謂。な。り。誤。解。す。る。こ。こ。な。か。れ。

主 鳥 なき
文 述

主 花 さく
文 述

主 春 すき
章 述

主 夏 来る
文 述

主 風 が 吹く
章 述

から

主 塵 が 立つ
文 述

主 鳥 なく
文 述

又

主 風 吹く
文 述

の。か。く。の。如。く。章。こ。文。こ。の。連。續。し。て。な。り。た。る。文。又。は。文。こ。文。こ。の。連。合。し。て。な。り。た。る。文。を。續。文。こ。い。ふ。

續文

複文

主 門 前
文 述

主 草 深し
文 述

主 鳥 の なく
章 述

は おもしろし
説述部

主 我 は
章 述

主 鳥 の 鳴く
補部 述

を きたり
説述部

か。く。の。如。く。文。中。に。文。は。章。を。含。み。た。る。文。を。複。文。こ。い。ふ。

即。ち。文。中。の。主。部。補。部。客。部。文。は。説。述。部。の。文。又。は。章。よ。り。成。

れるものを複文といふなり。

この単文、續文、複文は必ずしも西洋文典にいふ Simple Sentence, Compound Sentence, Complex Sentence などからずされば、他書に見えたる単文 (Simple Sentence)、合文複文 (Compound Sentence)、并に複文合文 (Complex Sentence) と全く等しきものと思ふべからず

尙、更めて、單文、續文、複文の定義を與ふれば、左の如し。

單文。一個の説述語を具有せる文を單文といふ。

單文は文の各部が語又は句より成れるものなり。

複文。文の部の文又は章より成れる文、即ちその主部補部、客部又は述部、又は章より成れる文を複

文といふ。

續文。章と文と連續して構成せる文又は、二個以上の文

の連合して構成せる文を續文といふ。

續文に於ける文又は章は單文にても複文にても可なり、又、その連續方、連合方は直接にても間接にても可なり。

續文に於て、一の主部の他の主部と同一なるべき文の意義を變更せざる限に於て、その一を存して他を省略することあり、かくの如くにして作りたる文を**省約文**といふ。

例

或る人、縣の四年五年果て、或る人例の事ども皆しをへて、或る人解由なごりて、或る人住む館よりいで、或る人舟に乗るべきところへわたる。

この括弧内にある或る人は皆省かれたる主部なり。尙、左に單文、續文、複文の例を示さん。

省約文

省約文

單文の例

單文の例 (印は主部、印は説述語としるべし)

花 ころぶ

月 傾く。

山 高し。

南朝第一の忠臣、楠正成、湊川に於て戦死す。

先鋒、加藤清正、既に内地に入りぬ。

彼の道鏡といひし僧は、遂に下野國に流されたり。

私は教師より賞品として半紙十帖をもらひたり。

私は、歌の本を、古今集を、よんでをります。

「花ころぶ」「月傾く」などは純然たる一の單文なれども、「先

鋒加藤清正」歌の本を古今集をの如きは一の文中に

換言話

主部補部各二つあるが如くに思はるべし、されども、之は二つあるにあらず。こは唯言換へたるまでのものにして、「先鋒」といひたるのみにてはや、不明なるが故になほよく明瞭にするために「加藤清正」といひ、又「歌の本を一層よくわかるやうにするために「古今集」といひたるなり。かくの如くいひかへたるをば凡て「換言話」といひ、文の部として取扱ふときは、二つを一つと見做して取扱ふなり。

續文の例

續文の例 (印は章、印は文と知るべし)

月落ち 鳥なきて 霜天にみつ。

霜軍營に満ちて 秋氣清し。

水は方圓の器に従ひ 人は善惡の友による。

單文・續文・複文の例

複文の例

日くれて 道遠し。
夏の夜はまだよひながらあけぬるを 雲のいつこに
月やこるらん。

複文の例 (印は章 印は文と知るべし)

年若き人の煙草をのむは あしきことなり。

手わろき人の憚らず文かきちらすはよし。

(手わろき人の見苦しめて人にかゝするはわるし。

(世人は)人生僅に五十年(なり)こ いはずや。

(古人)忠臣は孝子の門に出づこかや (いへり)。

盛遠は容顔は勝れざりけれご大の男にて力強く心剛
なりけり。

文の雜例

尙、此處に數多の文例を擧げ、且つ、その單文なりや續文なり
や、文は、複文なりや、だけをいひおく。その何故に單文なるか、
續文なるか、文は、複文なるかは、諸君自から攷ふべし。又、略語
あるは諸君自ら補ひみるべし。

昨日の風に花や散りぬらむ。(單文)

平氏、源氏に兵を鴨越に廻さる。(單文)

月も滿つれば缺け人も奢れば衰ふ。(續文)

彼言はずとも籍獨り心に愧ぢざらんや。(續文)

彼の人は雪はいたく降りしかごも來けり。(續文)

徳を修め智をみがく。(續文)

判官早業人に優れけり。(複文)
 弓を射れどあたらず。(續文)
 道遠けれども倦まず。(續文)
 身の上の非を知らねばまして外の謗をしらず。(續文)
 萬代經とも色はかはらじ。(續文)
 敷島の道なん特にすぐれておはしける。(複文)
 かしらもしらけてあはれに老いばむ。(續文)
 住吉の岸の姫松神さびにけり。(單文)
 問はるれば答へ問はれねばいはず。(續文)
 手紙をやりつればやがて返事來りぬ。(續文)

一道に達しぬればよろづのいたりもふかじ。(複文)
 汽車にのらんごて停車場に行きけるに既に發車しければえ乗らずして歸れり。(續文)
 夜ふけしかば月も入りぬ。(續文)
 其由くはしく論ぜしかご世に用ゐられざりき。(續文)
 山の景色すぐれてよき故に其名古より世に高く聞えたりといへどもいかゞあらむ。(續文)
 吾は菜の花の咲きたるに蝶のこまれるを見たり。(複文)
 前能登守教經は進むことありて退くことなし。(複文)
 氣候順なりしかば年ゆたかなりき。(續文)

畠山の庄司重忠は三日月といふ栗毛の太く逞くしき馬に乗りたり。(單文)

私は段々体が悪くなる。(複文)

その地東北は高くして西南は漸くひくし。(複文)

日暮れかゝるに宿るべきところあし。(續文)

空よく晴れ風おもむろに吹く。(續文)

豹死して皮を止め人死して名を留む。(續文)

行きくれて木の下かけを宿させば花やこよひのあるじならまし。(續文)

◎文の種類

文の種類

叙述文、疑問文、命令文、咏嘆文等

前回に於て、予は文を文の構成の上より分類することを説きたり。本回に於ては、文を文の性質の上より分類することを説かん。

普通の文典には文を文の性質によりて分類して、叙述文、疑問文、命令文、咏嘆文の四ごしたり。されど、此等は西洋文典にあるをそのまま取入れたるものにして、我國文にはや、適せざるものありと思ふ。

いで、左にその理由を説かん。

その理由を説く前に、諸君はまづ、西洋文典に於ては、如何なる理由によりて文を叙述文、疑問文、命令文、咏嘆文の四種に區別するか、を知りおかざるべからず。されば、予は先

西洋の文の種類

づ西洋の分類より説くべし。
英文を例としていへば、英文に於ては、

Man is mortal.

We stand here idle.

此の如き文を Declarative sentence といふ。普通の國文典に
叙・述・文・といふは、即ち是なり。

此文の特徴は主部最初にあり、文尾は「ピリオッド」にて
終はる。こゝなり。

Is man mortal?

Why stand we here idle?

此の如き文を Interrogative sentence といふ。普通の國文典
に疑・問・文・といふは、即ちこれなり。

此文の特徴は主部の前に動詞文は、疑問代名詞疑問副

西洋の敘述文

西洋の疑問文

詞。來。り。文。尾。は「インターロゲーション」にて終は
る。こゝなり。

Put money in your purse.

My boy, go away.

此の如き文を Imperative sentence といふ。普通の國文典に
命・令・文・といふは、即ち是なり。

此文の特徴は主部なく、呼格に於ける語、即ち獨立部の
ある。こゝはあり、文尾は「ピリオッド」にて終はる。こゝな
り。

What a foolish boy you are!

Give me liberty!

此の如き文を Exclamatory sentence といふ。普通の國文典に
咏・嘆・文・といふは、即ち是なり。

西洋の命令文

西洋の咏嘆文

西洋の・敘述文・疑問文・命令文・咏嘆文

此文の特徴は主部なく、もし主部あるときは必ず疑問副詞にていひ始めらるべく、文尾は「エキスクラメル」シ。ン。マ。ー。ク。にて終ることなり。

英文典に於ては、文を意義の上より分けて、右の四種とす。あかれども、此區別は之にて完全無缺あるべきか、予はやや疑なきこと能はず。現に某英文典の如きは此他にあほ一種を設けたり。是右四種の區別の不完全なることを表示せるものにはあらずや。

予思ふに、英文法家は右四種の區別を以て性質の上、即ち意義の上よりの區別なりとすれども、それは實は誤なり、右四種の區別は實に形の上よりの區別たればなり、予が右に此文の特徴は「いひたるに着目して、その然る所以を知るべし。」此の如く、右の四種の類別をば形の上より文を類別したる

ものなりとすれば、此分類法をば直に我國に移して我文をこの四種に分たんとするは如何あらん。我從來の國文には「一」等の符號を用ゐたるものなき故、此等の符號によりて我國文を類別せんことは全くなし難きことなり。されば、彼國文の四種の分類法を我國文に適用せんことは全く不當のことなりと信ず。

もし、一種の形よりして我國文を分たんとせば、或は左の如く分類すべきか。

一、動詞にて終る文。

例。

月落ち鳥啼きて霜天に滿つ。
兄は弟を愛し弟は兄を敬ふ。

二、形容詞にて終る文。

例。

任重く道遠し。

霜は軍營に満ちて秋氣清し。

三、助動詞にて終る文。

例。

心廣く體胖あるべし。

徳高き行よき人は世に敬せらる。

四、テニヲハにて終る文。

例。

汝は學問を好むか。

明日は雨降るべしや。

五、感嘆詞にて終る文。

例。

八重垣つくる其八重垣を。

淺みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳

か。

言詞の位置の順當なるものは右の如く分つべけれども、そ

の順當ならざるもの文は、略語あるものに至りては、此等の

外に又一二種を設けざるべからざらん。

例へば、

まごかにめくれよやよ子供。

雨ぞ降るてふ歸り來吾か兄。

そこに居るはたれ。

魚心あれは水心。

慶應三年の頃かよ。

の如し。

文の意義の上
よりの分類

されども、かくの如く分類せんこと我國文に何の必要あるべき。予は此の如きは全く必要なきものと思ふをり。さて、我國の文を性質・意義によりて分てば、大凡左の十三種となるべし。

彼は善人なり。

太郎は學校に行けり。

此の如きをは**説定文**といふ。

彼は善人にあらず。

我國は土地廣からず。

此の如きを**打消文**といふ。

打消文の説定文と異なるところは、ずの有無にあり。

He is a good man.

He is not a good man.

打消文

説定文

右の第二、第三の二つの文は打消文にして、第一、第四の二の文は説定文なり。

今日は雪ふるべし。

彼は善人なるべし。

此の如き文を**推量文**といふ。

花未ださかざるべし。

戦場の有様もかくの如くならん。

かくの如き文を**想像文**といふ。

才子ぶりて事をあせごもいかゞあらむ。

霞か雲かはた雪か。

かくの如きを**疑念文**といふ。

推量文

想像文

疑念文

説定文・打消文・推量文・想像文・疑念文

尋問文

御陵はいつくにあるか。
和殿は誰ぞ。

かくの如き文を**尋問文**といふ。

何ごてさる所業をばなしつるぞ。

おのが國のこご知らであるべしやは。

かくの如き文を**詰問文**といふ。

何の仔細かあるべき。

今更に何をか嘆かん。

かくの如き文を**反動文**といふ。

あごよ、こゝに來れ。

勉強しえらるゝごき大に勉強せよ。

かくの如き文を**命令文**といふ。

心しれらむ人に見せばや。

337138

命令文

反動文

詰問文

希望文

一日も早く願を果したし。
かくの如き文を**希望文**といふ。

幼きものごてなあなづりそ。

つらきことありごも恨むな。

かくの如き文を**禁止文**といふ。

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけから
まし。

われ男子ならましかば君の御前に仕へまつりて参り
なまし。

かくの如き文を**假定文**といふ。

嗚呼悲い哉君は遂に逝き給ひにしよ。

春の花のおもしろや。

かくの如き文を**咏嘆文**といふ。

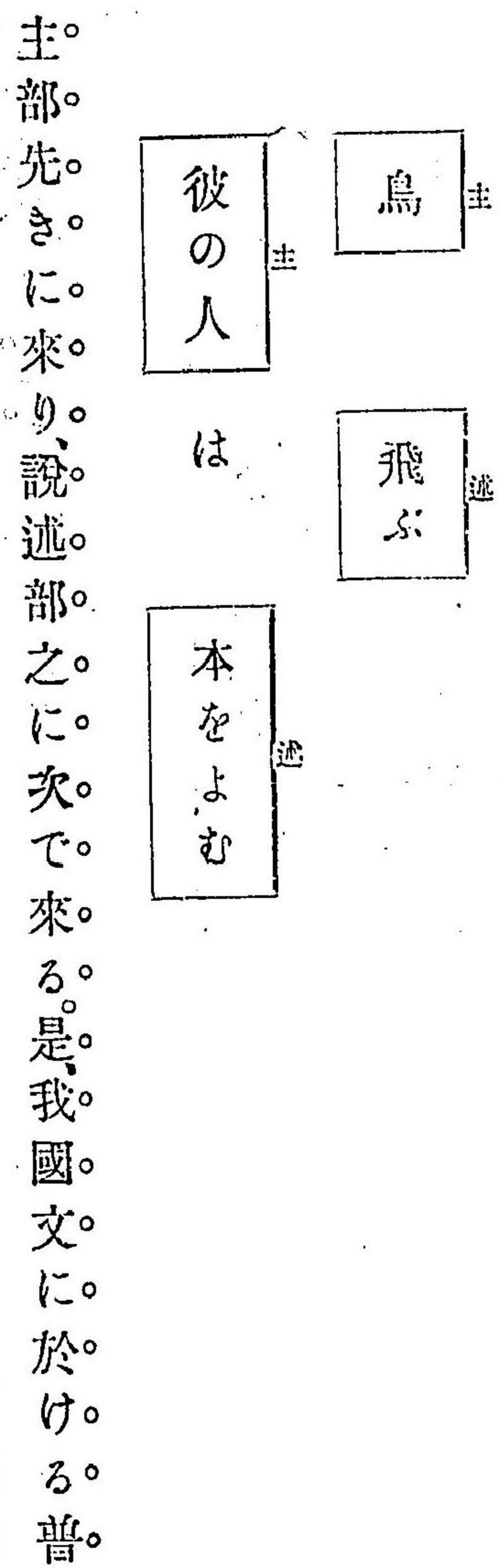
尋問文・詰問文・反動文・命令文・希望文・禁止文・假定文・咏嘆文

あほこの他にもあるべし。
 さて、此等の類別は、我國文に於ては、幾何程の度まで、入用なるべきか、はた、幾何程の度まで、不用なるべきか、之は特に諸君の熟考を煩す。

正序法・顛倒法

正序法

既に説きしがごとく、文には主部あり、説述部あり、又説述部の中には補部あり、對部あり、客部あり、又その各部に添加語のあることあるなり。さて、それ等の主部、説述部、補部、對部、客部、添加語は、文中に於てはいかなる順序に置くべきものなるか。今よりは此順序を考へん。



正序法・顛倒法

又、通の順序なり。この順序を正序とす。

彼の人

は

本をよむ

小兒

が

犬をうつ

校長

優等生に賞品を與ふ

甲氏

は

甲氏の飼犬を黒と呼ぶ

甲氏

この品物をコップといふ

教師

生徒に六花を六つの花と讀ます

主部先に來り、補部之に次ぎ、説述語終に來る。又、
 主部先に來り、對部之に次ぎ、説述語終に來る。又、
 主部先に來り、對部又は補部之に次ぎ、客部之に次ぎ、説述語終に來る。又、
 主部先に來り、對部次に來り、補部次に來り、客部次に來り、
 説述語最後に來る。
 是我國文に於ける普通の順序なり。之を正序とす。
 さて、補部中にもあるものは動作に關する場所又は時を示し、あるものは動作の方向を示し、あるものは動作の終始を示し、あるものは原因を示し、あるものは對比の標準を示し、

あるものは目的をいひあるものは結果を云ひあるものは處分を受くるものこいはるゝ事物をあらはす夫等諸種の補部の順序はいかにかこいふに夫等は確に定まりたる順序はなきやうなれども先づ最初に時をいひ次に處方向又は動作の終始をいひ次に品物をいひ其次に目的原因又は結果をいふが最も穩當なるが如し從て之を正序となすべし。

添加語即ち形容詞副詞は英語獨逸語希臘語拉丁語及び支那語等に於ては添加すべき語の前に來るを通則とす但し佛蘭語に於ては或るものは後に來るを通則とするなり我國文に於ても亦添加語は其添ふべき語の前に來るを普通とす依りて之を正序とす。

即ち

主語の添加語は主語の前に來り、
 補語の添加語は補語の前に來り、
 對語の添加語は對語の前に來り、
 客語の添加語は客語の前に來り、
 説述語の添加語は説述語の前に來る、
 を正序とす。

然るに茲に説述語の添加語は通例説述部の添加語なること多きが故に説述語の添加語は通則に従ひて説述部の初に來ること多し依て之を正序とす。

例へば

彼

は大に

英語を勉強す。

城中

悠然として

音楽を奏したりき。

仁安よりこなた二十年の榮花

遂に

重盛が一睡の

夢となりぬ。

日本臣民

は法律に定めたる場合を除く外

信書

の秘密を侵さるゝことなし。

當今の文法家中には文を主部説述部の二つに分たずして、主部補足部説述部の三つに分つもの多し。此等は我國

文に前記の正序法のあることを知らざるものゝ所爲にして、皆非なり。

昔

延喜の御代に

紀貫之といふ人

ありけり。

新待賢門院に

伊賀局といふ

ありけり。

一年

武藏守師直が皇居を襲ひ奉りし時に

人々

防ぐべきたよりなかりければ……

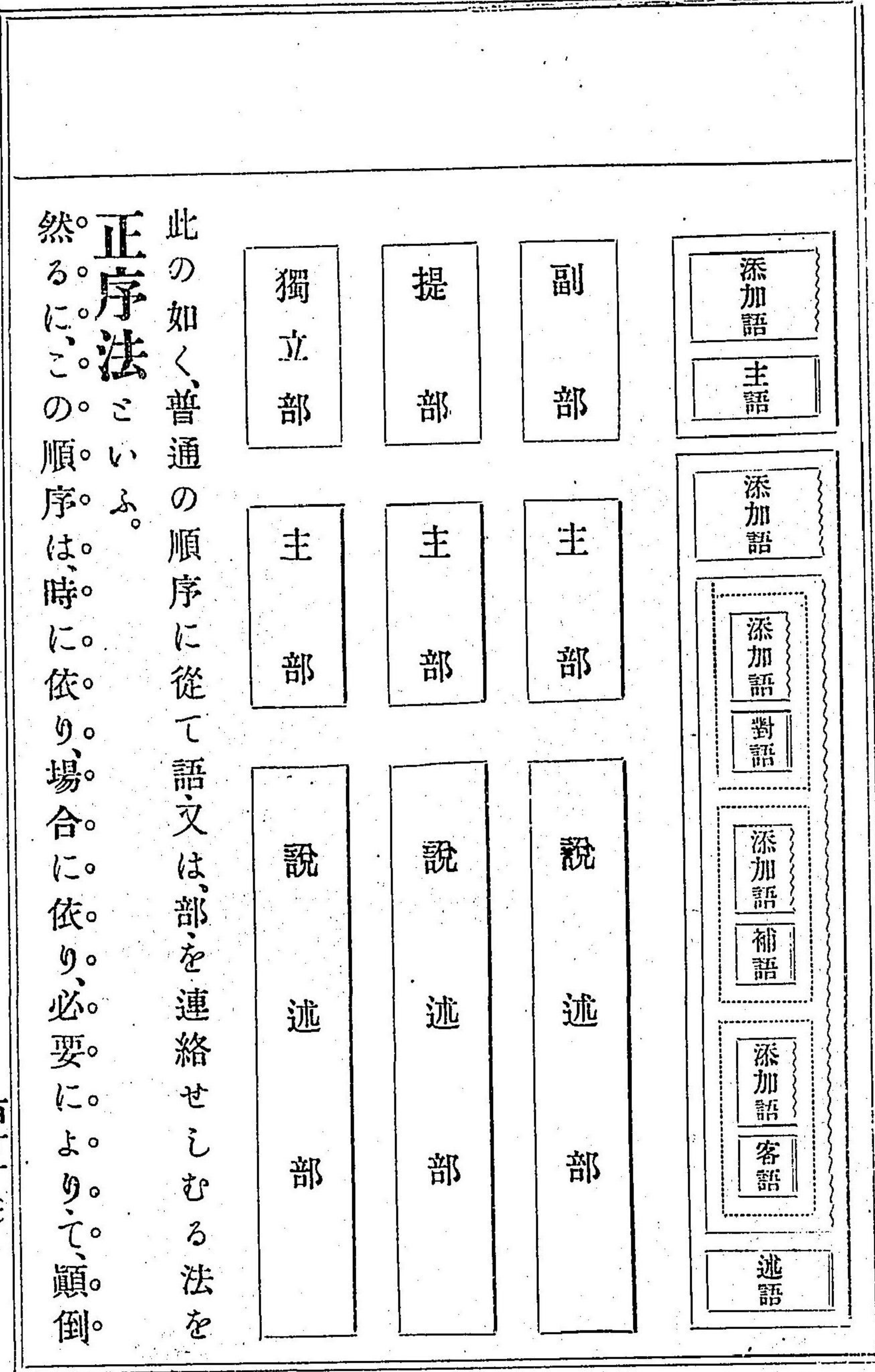
將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ

勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スベシ。

いかに。佐々木殿。久々見参し奉らず。

磨墨は、御邊の賜はらせ給ひけり。生唆は、御邊も蒲殿も再三御所望ありけれども御許なし。

軍は、すべき程はしつ。人の笑はれ草には、よもならじ。副部提部又は、獨立部のある文に於ては、副部提部又は、獨立部が先に來り、本文又は、その餘の部分がその次に來ること。我國文に於ては、普通の順序なり。依りて、之を正序とす。右に述べたるところを圖を以て示せば、左の如し。



此の如く、普通の順序に従て語又は、部を連絡せしむる法を正序法といふ。然るにこの順序は、時に依り、場合に依り、必要によりて、顛倒

顛倒法

せ。ら。る。こ。こ。多。し。即。ち。或。は。對。部。又。は。補。部。又。は。客。部。を。主。部。
 の。上。に。お。く。こ。こ。あ。り。或。は。説。述。語。を。對。部。又。は。補。部。又。は。客。部。
 の。上。に。お。く。こ。こ。あ。り。又。副。部。を。主。部。又。は。對。部。又。は。補。部。の。下。
 に。お。く。こ。こ。も。あ。り。又。獨。立。部。を。最。終。に。お。く。こ。こ。も。あ。り。此。の
 如。く。す。る。を。ば。右。の。正。序。法。に。對。し。て。顛。倒。法。と。い。ふ。
 例へば、

うねの野に田鶴ぞなくなる。あけぬこのよは。
 御警固の武士ども朝に之を見つけて 何事をいかに
 なるものが かきたるやらん こと……
 利仁來りて、いふやう。いざさせたまへ 浴に 太夫ごの
 といへば、……「いつら 湯は」 といへば……

の如し。

かりがねの 今ぞ なくなる 秋きりの上に。
 いざこころはん 我が思ふ人はありやなしやぞ。
 教へ候ひける佛をば 何が 教へ候ひけるぞ。
 (我ハ) みせばや 人に よはのけしきを。
 うへも むかしのをのこは 棹はうがつ波の上
 の月を 船は襲ふ海の中の空を こそは いひけん

省略法

或る人、縣の四年五年果て、(一)例の事ども皆をへて、(一)解由なごりて、(一)住む館よりいで、(一)舟に乗るべきところへわたる。

此文は、先にもいひしが如く、省約文にて、(一)印の處に主語「或る人」を省きたるなり。

熊谷は西の城戸口濱際に扣へて、……相待ちける。後の方に馬の足音人影のする様に覺えければ、雲透に是を見るに、武者二騎馳せ來れり。近付くを見れば、平山なり。案に違はずと思ひて、いかに、平山殿か。季重。問ふは誰ぞ。熊谷殿か。直實。名乗りあひ、共に一所に寄合ひたり。此文は勢の急なるを要する故に、數多の語をば省きたり。今

省略法

その語ごもを補ひ見ば、凡左の如くなるべし。

熊谷は西の城戸口……待ちける。後の方に馬の足音人影のする様に覺えければ、熊谷雲透に是を見るに、武者二騎馳せ來れり。熊谷武者二騎の近付くを見れば、(一)騎は平山なり。熊谷案に違はずと思ひて、熊谷いかに、平山殿か(と問へば、平山)季重(を答へ、さて、平山)問ふは誰ぞ。熊谷殿か(と問ふに、熊谷)直實(と云)に名乗りあひ、(兩人)共に一所に寄合ひたり。

此の如く、種々の必要によりて、原文の意義に變動を生ぜざる限に於て、文章の言句を省くことあり。之を省略法といふ。

我君汝等所謂自稱對稱の代名詞が文の主部たるべき、此等を省略することは我國文に於ては最も普通なること

なり。

尙ほ二三の例を擧げん。

一人は東へ行き、一人は西へ行き、一人は北へ行きぬ。

兄は今若くて七つなり、中は乙若くて五つなり、末は牛若くて今年生れなり。

我は龜井戸に行きたれども汝は未だ龜井戸に行かざるべし。

そは君が愚なるによりてツノ結果ニ至リシなり。

世の中にあらまゝかばヨカラマシごおもふ人なきが多くもなりにける哉。

並列法・並續法

附 換言法、對語法、疊語法

梅櫻桃梨柿栗あり。

梅ご櫻ご桃ご梨ご柿ご栗ごあり。

梅も櫻も桃も梨も柿も栗もあり。

此等は夫々の語を列擧したるものにして、明に物を列擧したる意を示せるものなり。

赤し 青し 黒し。

立つ 走る 轉ぶ。

天曇る 雨降る 風吹く 雨止む。

此等も斷止段に於ける用言又は、完全なる單文を列擧したるものにして、夫々の觀念又は、思想を列擧したる意を示すなり。されど、

赤く 青く 黒し。
立ち 走り 轉ぶ。

天曇り 雨降り 風吹き 雨止む。

此等は前例とは稍異なりて、「赤く」「青く」「又、立ち」「走り」は續用段の形を以て相連續して、下「黒く」「又、轉ぶ」に連續し、「天曇り」「雨降り」「風吹き」は章となりて相連續して、又、下「雨止む」に連續したり。形に於ては、此の如く相連續したれども、その意義に於ては、前例と等しく、尙ほ、觀念又は、思想を列舉したる趣あるなり。
形に於ても列舉したる趣あり、意義に於ても列舉したる趣ある。排列法を並列法といひ、形に於て連續せしめ、意義に於て列舉したる趣ある。排列法を並續法といふ。

並列法
並續法

天照大神御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天

皇第二皇子一品兵部卿親王護良逆臣の爲に亡され、此天照大神御子孫は神武天皇のこゝ、神武天皇より九十五代の帝は後醍醐天皇のこゝ、後醍醐天皇第二皇子は一品兵部卿親王護良のこゝなり。されば、天照大神御子孫と神武天皇と、神武天皇より九十五代の帝と、後醍醐天皇と、神武天皇第二皇子と、一品兵部卿親王護良とは各並列法によりたるものにして、且つ同一物をあらはせるものなり。

敷島の大和國は皇神のつくしき國、言靈のさきはふ國と、かたりつきいひつがひけり。

この皇神のつくしき國、言靈のさきはふ國も並列法によりたるものにして、且つ同一物をあらはせるものなり。此の如く、並列法によりて列舉したる二個以上の言句が全く同一物をあらはせるものなるときは、第二以下の言句を

換言法

第一の換言語といひ、此の如き言句を列舉するを換言法といふ。

大宮は此處とさきけごも大殿はこゝといへども春草のしげく生ひたる……。

大宮は此處とさきけごも

大殿は此處といへども

春草のしげく生ひたる……。

上つ瀬にうかはをたて下つ瀬にさでさしわたし山河もよりて仕ふる神の御代かも。

上つ瀬にうかはをたて

下つ瀬にさでさしわたし

山河もよりて仕ふる神の御代かも。

現御神と大八島國所知倭根子天皇の授け賜ひ負ひ賜ふ貴き高き厚き大命を受けたまはり恐みまして……。

負ひ賜ふ

大命を受けたまはり……。

貴き
高き
厚き

此等——線を施したる部分は並列法によりて並列せしめたるものなるが、此等は形に於ても亦、意義に於ても各自相連続するこゝは全くかくして、各自別々に下の係るべき語に係りたるなり。

對語法

並列法によりて並列せしめたる内にて、例へば前例に於ける「大宮」と「大殿」と「此處」と「此處」と「さきけごも」と「いへごも」この如くに、特に同資格の言句を兩々相對せしめたる趣あるものを通常對語法といふ。

うつくしくやさしく愛らしき人

うつくしく
やさしく
愛らしき人

天の下の公民を恵み賜ひ撫て賜はんごなも隨神おも
ほしめさく……。

天の下の公民を恵み賜ひ

撫て賜はんとなも……。

此——線を施したる部分は並續法によりて連続せしめたるものなるが、此等は形に於ては相連續すれども、意義に於ては全く並列するのみにて、而して、各自別々に上文は、下の係るべき語に係りたるなり。

百敷の大宮人は船なめて朝川渡り船競ひ夕川渡る。

百敷の大宮人は船なめて朝川渡り

舟競ひ夕川渡る。

昔は九重の雲の上にて春の花を弄び今は八島の浦にして秋の月を悲ぶ。

昔は九重の雲の上にて春の花を弄び、

今は八島の浦にして秋の月に悲ぶ。

顔は彌生の櫻花に似て雨を厭ひ風を恨むる風情あり。

顔は彌生の櫻花に似て雨を厭ひ

風を恨むる風情あり。

此等——線を施したる部分皆然り。

並續法によりて連続せしめたる内にて、特に同資格の言句を相對せしめたる趣あるものを通例**疊語法**といふ。

換言法・對語法・疊語法は専ら作文上に於ていふことにて、文法に於ては全く不用なり、只序を以ていひたるのみなり。

疊語法

添詞法

添詞は所謂續體段に於ける動詞形容詞并にのがなるたる等の語を以て終れる諸種の語句の名詞の添加語となりたるものを總括していふものなるが故に添詞はその添加する名詞に直接に連續するご間接に連續するごに係らず凡て續體段に於ける語尾を心るべきものなり。

されば「心」に「清き」といふ添詞を添加せんごせば、

清き心

とすべく之に又「明き」といふ添詞を添へんごせば、

明き清き心

とすべく之に又「正しき」といふ添詞を添へんごせば、

正しき明き清き心

とすべく之に又「厚き」「廣き」「高き」等の添詞を添へんごせば、
夫々、

厚き正しき明き清き心

廣き厚き正しき明き清き心

高き廣き厚き正しき明き清き心

とすべきなり。

然るに此形は近來は口語には常に用ゐられごも文章には殆んど全く用ゐざるなり(文章には之ご異ありて、

清き心

明く清き心

正しく明く清き心

厚く正しく明く清き心

廣く厚く正しく明く清き心

高く廣く厚く正しく明く清き心

なごのみ常に用ゐる)されば、何人の著なりしか忘れたれども、某書には「——き——き——き、ごつゞけたるは誤なり」とさへ説きたるが見えたり。諸君の内にも或は頗る奇異に思はるゝ向もあらんが、夫は決して誤れるものにはあらず、祝詞宣命には例數多あることにて、なかくに添詞法の六体たるものなり。

思ふに、該著者の如きは一半の知識を有して一半の知識を有せざるものあらん。即ち、該著者は、六個の形容詞が續用段の形を以て連續したる一聯の形容詞句(即ち、並續法によりて連續したる六個の添詞より成れる一添詞句)が心に添加したる

高く廣く厚く正しく明く清き心

の形容法のみを知りて、而して、六個の形容詞が別々に心に

添加したる(即ち、並列法によりて列舉せられたる六個の添詞、が心に添加したる)

高き廣き厚き正しき明き清き心

の形容法のあるを知らざるならん。

此の如き形容法の類例は獨乙文にもあり。左の如し。

Herr Meyer hat seine goldene Uhr verloren.

Die deutsche Sprache ist eine der ältesten, reinsten, und gebildetsten (Sprachen) unter den lebenden Sprachen.

動詞より成れる添詞に於ても亦然り。

並列法によりて列舉せられたる添詞を、並續法によりて列舉せられたる添詞に注意すべし。

副詞法

副詞法

副詞は凡てその副詞の添ふべき語に成るべく近き所におくを法とす故に一副詞の下に近く動詞形容詞又は副詞等のあるときはその副詞はその動詞形容詞又は副詞にそひたるものご認むべし。

この二の規定を副詞法といふ。

然るに茲に注意すべきことあり一文に於て説述部に添加する副詞ある時はその副詞は先に述べたるが如く正序法に従ひて説述部の最初に來るなり此場合に於てはその副詞はその説述部中に添加語の添ひたる補足語ある時はその添加語(即ち添詞)に添加したる添加語(即ち副詞)と誤認せらるゝことあり又その反對に補足語の添加語(即ち添詞)に

副詞法

添ひたる添加語(即ち副詞)が説述部全體に添加したるもの
 誤認せらるゝことも亦常に多し。されば、一文中にて説述
 部全體に添ひたる副詞ある時は、その副詞の下に句讀點を
 施して以てその副詞の説述部全體に添ひたるものにして、
 その下にある添詞(即ち補足語)の添加語に添ひたるものに
 あらざることを示すか、又はその副詞を補足部の下に移す
 かして、その意義の誤認せられんを避けざるべからず。
 ちかると、此等のことを知りや、知らずや、世には大なる錯
 誤を起すべき文章を草する國文家、操觚者極めて多し。例へ
 ば、

たゞ遊ぶがわろしといふなり。

この文は、解釋のしやうによりては「たゞ遊ぶがわろし、何に
 てもして遊べばよし、といふなり」「といふことにもなり、又「た

ゞ遊ぶがわろし」といふのみにて、他の事をいふにはあらず
 といふことにもなるなり。又、

少しく面白き話をせん。

この文も兩様の意義に解せらる。即ち「少しく面白き話、あま
 り面白くはなき話」をせん」とも解せらる、又、少しく「面白き話」
 をせん、面白き話を四五分間せん」とも解せらるゝなり。此の
 如き例、なほ數多あり。二三を舉ぐれば、

更に別様の媚を加へぬ。

僕は實際死んだ弟よりも彼の居らなくなつたのを悲む。
 判然とさゝしことを理解したり。

副詞法に關したる此の如き智識を以てして判断せば、第十
 二回國語科檢定試験に出でたりし
 室内にては高聲に談話を禁ず。

の文が正格の文にもなり、破格の文にもなること、一目瞭然たるべし。

尙ほ、諸君は左の文が果してよく著者の思想を正確にあらはせるか否かに就いて、一考せよ。

東湖は、小楠の如く思想に富まざるも、象山の如く藝術に精しからざるも、經世的識見、確乎として徹底する所有り。東湖は、鷗處の如く明敏ならざるも、景岳の如く聰慧ならざるも、經世的手腕、自から其獨歩の壇場を有す。東湖は、南洲の如く大度雅量に乏しき所あるも、經世的氣魄、他の企て及ぶ所にあらず。而して、東湖は、識見、手腕、氣魄に於て比較的に平均し、善く勢を制するの經世家として、また善く勢に乗するの革命家として、維新革命

史に於ける第一流の位置を占む。 (紫山著、藤田東湖)

懸詞法

音菊の聞み菊さ菊く菊の菊しら菊つ菊ゆ菊よ菊る菊は菊お起き起て起ひ起る起は起お火も火ひ火に火あ火へ火ず火消火ぬ火べ火し火。

番馬、醒守か井、柏原、不破の關屋は荒れはて、猶守もるもの
は秋の雨の、いつか我身の終をはり終なる、熱田の八劔ふし
拜み、鹽干に今や爲なる爲みがた、傾尾く尾月に道見えて、明けぬ
くれぬ鳴と鳴ゆく鳴道の、末は鳴いつく鳴こ鳴こ鳴を鳴こ鳴ふ鳴み、濱名の橋江

の夕鹽にひく人もなき捨小舟沈みはてぬる身にしあれば誰かあはれ云いふぐれの入合なれば今はとて池田の宿につきたまふ。

めぐる日の積もる三年の春すぎて夏もはや五月雨のふりわけがみの玉鬘懸かゝる業はいつか身になれ馴ごろも袖ひちていざく早苗取らうよ。

身を鮑あきやまや世の中を盛うだの御狩場よそに見て、男鹿伏すなる春日山水みかさ笠ぞまさる春雨の音はいづこそ吉野川。

此の如く、一語の全部又は一部が他語の全部又は一部、音又は音并に意義に於て同一なる時、その同一なる部分を共

懸詞法

通の連鎖としてその二語を連続せしむることあるなり。この連鎖法を懸詞法といふ。此例は中古以後の歌に多く、又特に、謠曲、浄瑠璃等に極めて多し。

序語法

序語法

某の語をいひ出さんが爲に音に於て又は意義に於てその語に縁ある他語をまづいひ出すことあり。そのまづいひ出したる縁語を總稱して序語といふ。

序語に二種あり、一を枕詞又は冠辭といひ、一を序詞といふ。枕詞とは序語の四音又は五音又は六音なるものをい

ひ。夫より音の数の多きものを凡て序詞といふ。
 序語は凡てその下の縁ある語に關係する外下文に何等の
 關係をも有するこゝなし。此點に於ては、章の文より成れ
 る合文に於ける章のみに大に異なり。誤解するこゝ勿れ。

例

乙女らがはなりのかみをゆふま山雲なたなびき家の
 あたりみん。

たちのしりさやにいりぬにくづひく我妹

ほごさきすなく尾の上の卯の花のうきこゝあれや君
 が來まさぬ。

我妹子があかもひつちて植ゑし田をかりてをさめん

くらなしの濱

こせやまのつらつらつばきつらつらに見つゝしぬば
 なこせの春ぬを。

こせやまのつらつらつばきつばらかに見つゝ思はな
 こせの春野を。

我妹子に衣かすがのよしき川よしもあらぬか妹が目
 を見ん。

唐衣きならの山になくごりのまなく時なき戀もする
 かも。

梓弓春の山邊を越えくれば道もさりあへず花そちり

序語は上世の歌文には多く用ゐられたれど、後世のには少
し。

係結法・轉結法

係結は、從來、動詞文はテニヲハの處にて説きたるが多けれ
ども、そはたゞ便宜に従ひたるまでにして、本來は文章篇に
屬すべきものなり。
さて、この係結のことは、諸君は既に動詞文は、テニヲハの處
にて研究せられしならんと思ふが故に、こゝに再びよく必
要はなかるべけれども、今、いひし如く、本來、文章篇に屬する

係結法
結詞
係詞

ものなるが故に、概略を今一應こゝにて説くべし。
係結 といふは、文の中の某處に或るテニヲハのあるとき、
其テニヲハに應じたる語を以て、其文の終をなすをいふな
り。而して、其上にあるテニヲハを**係詞**又略して係といひ、
後の應じたる部を**結詞**又略して結といふ。而してこの上
下の照應をカカリムスベしといふなり。こゝは西洋文法にいふ
Concord 又は Agreement のやゝ趣を同じくせり。

西洋文にては主格の單數、復數によりて、又、人稱の如何に
よりて、之を受くる動詞に變動を生ず、主格と動詞とよく
相一致するを Concord 又は Agreement といふなり。
例へば、

He (代名詞 單數 第三人稱) is. was. has come.
I (代名詞 單數 第一人稱) am. was. have come.

We (代名詞 複數 第一人稱) are. were. have come.

我國の係結は
西洋の異なる

西洋文にては主格の變動によりて右の如く動詞に變動を
生すれども我國文に於ける係詞はたゞ主部にのみつきて
かゝりごなるにあらざりて補部にも對部にも客部にも副
部にも提部にも添ひて結を變ぜしむるこゝあるなり。
即ち左の如し。

我^主は花^補をこそ見^{述語}れ。

我^主は君^對にこそ之^補を與^{述語}へめ。

我^主はそ^補を我國^客の梅の花こそ見^{述語}つれ。

昔^副こそさ^主る人もありけ^{述語}め。

係詞は、通常これを三種に別つ。その別并に係詞は左の如し。
甲書には、

第一段 はものが徒

第二段 のかぞやかなん何

第三段 こそ

乙書には

第一段 もにをはばのが徒

第二段 のかぞやかなん

第三段 こそ

かくてこの第一の係は大槻氏の文典の第一活用他の文
典の第三活用即ち斷止段にある詞にて結び第二段の係は
大槻氏の文典の第二活用他の文典の第四活用即ち續体段
にある詞にて結び第三段のかゝりは大槻氏の文典の第三

活用他の文典の第五活用即ち已然段にある詞にて結ぶを法とするなり。

徒の係は係詞とすべきものゝあき場合をいふなり。左の例中に「」を附けたるもの是なり。

第一段の係結

ある人戌の時に門出す。

秋風吹きぬ。

夜明けたり。

人に撃たる。

尾張國に止りたまふ。

日を暮らしつ。

花は散りぬ。

鳥はくろじ。

家をば建つ。

賊徒をやき殺しき。

皇子も失はれ給ひぬ、頼政も滅びぬ。

我もおそく起きたり。

かれ枝に鳥のこまりけり。

雨がふる。

かくの如きをば通例第一段の係結といふ。

されども普通の文はすべて断止段終止法の詞にて結ぶが常に右の所謂第一段の係詞の有無は毫もその結に變動を起さしむるこそあしければ、夫等の詞をばこそさらさらばこりいたして第一段の係とする必要もなかるべし、さらばこりまた強て第一段の係とするを否定する必要もなかるべし、要するに、各人各個の好にまかせ置きて差支なかるべし、必要不必要は暫く之を措きて、右第一段の係詞は實際係詞

たる資格を有せるものなりや否やを考ふるには、もは本來は係詞にあらず、されども、習慣上係詞とする方或は便ならんか。はもを係詞とする以上は重ぬる意義の、并に、だにすらさへのみばかりも亦第一段の係詞とするを要す。之は從來の文典になきこと故、諸君は或は意外ならんが理に於て然るべきものあるなり。

乙書には、をばを第一段の係詞とすれども、にをば對部補部を示すものはをを連續したるは、又は二個の文章を連續せしむるものにして、何れも正當に係なるべき性質のものにあらず、正に此表中よりのぞくべきものなり。にをばを第一段の係詞とせしは極の初學者に便せん古き仕方にして、一般の文法的知識の發達したる今日、特に文法の一斑を會得せらるゝ諸君に向ひては、最早説くべきものにあらず。

第二段の係結

ず。須。ら。く。右。の。表。中。よ。り。除。去。る。べ。き。も。の。な。り。
されば第一段の係を強て存せん。欲するときは、その係詞として、はも、だに、すら、さへ、のみ、ばかり、の、が、徒、をおくべきなり。

君の早く起きたる。

君が來ませる。

家を了たつる。

この畫ぞここにおもしろき。

櫻を山にぞ植うる。

君やこし。

みどりなる一つ草ぞ春は見し。

雪かつもれる。

いまだ秋の收にも及ばぬに世の中のをほりにける。

つねに君がおもほせりける。
なごて恐るゝここかある。

かの山なん富士山なる。

國なん榮ゆる。

親になん似たる。

何を求むる。

かくの如きをば通例**第二段の係結**といふ。

甲書に何の係さあるは何日何時何人如何様幾人幾何何
地何方誰誰人幾個何物等の語の上にあるをいふなり。

この第二段の係詞の中に、何を古は係さしたりされば、古
き文典をよみたる人は之をば係の如く思ふ人もあるべけ
れど、之は決してさにあらず、何の下にはかの來るが通例に
て、此下に來るか、が實は係たるなり。而して下にかの來ぬ場

第三段の係結

合の何が結に變動を起さしむるは、後に説くべき呼應とい
ふものに屬するものなるが故に、こゝにては何をこの表中
より除くをよじさす。

又の「がは本來天の下」「私の物」「天が下」「余が言の如く二物を
結びつくる語にして、數學に用ゐる十の力ある語なり。この
語轉じて今は係詞のこゝくなれり。されども、なほ本來の十
のおもかげは明にみこめらる。されば此二語もまた表中よ
りのぞく方よろしかるべきなり。

いはふ今日こそたのしけれ。

梅の花色こそ見えね。

月見ればちゝに物こそかなしけれ。

かたみこそ今はあだあれ。

雪ふりて年のくれぬる時にこそ、遂にもみぢぬ松も見

えけれ。
 よそにふる雨こそきけ。
 人しれず春をこそまで。
 折りつれば袖こそ匂へ。

此の如きを通例**第三段の係結**といふ又、この係結といふ。凡て上にこそ、のテニ、チハの來りたるときは、他に如何やうなる語ありとも、下は第五活用即ち已然段に於ける語にて結ぶ例なり。

右第一段の係、第二段の係、第三段の係に於て、第一段の係が第二段の係又は、第三段の係又は他の第一段の係と重なりてあらはるゝことは普通のことなるが、第二段の係又は、第三段の係が他の第二段の係又は、第三段の係と重なりてあらはるゝことは例少きことなり。

複雑なる例

重ぬる必要ありて重ぬる場合は固より他の容喙を許さず。れども之を慣例上より見れば、之は極めて特別の例なるが故に、その必要な限は二者を重ねざるをよしとす。

第一段の係と第二段の係との重なりたる例并に、第一段の係と第三段の係との重なりたる例は此處に諸君の前に特更に掲げて示すべきだけの價值あるものにもあらざるべきが故に、今は稍々複雑なるもの并に、特例に屬するもののみを掲ぐ。

新羅へか家にか歸る。

新羅へか家にか歸る。

人皆かあのみや然る。

人皆かあのみや然る。

高砂の峯の松とやよの中を守る人とやわれはなりなむ。

高砂の峰の松とや
よの中を守る人どや
われはなりなむ。

この山のつきばのみこそこの水のたえばのみこそ……やむときもあらめ。

この山のつきばのみこそ……やむときもあらめ。
この水のたえはのみこそ

此等は係詞二つ重なりたるを下に一の結にて結びたるが如くに見ゆべけれども之は上を並列法によりていひたるが故にしか見ゆるにて左註の如く書き改めて見れば一の係を一の結にて結びたるものなることは明に知られぬべし。

かがみなすあがもふつまありといはこそ家にも行かめ國をもあぬばめ。

かがみなすあがもふつまありといはこそ
家にも行かめ
國をもしぬばめ

日本の本のやまこの國はここだまのさきはふ國こそ
ふるごごにあがれきたれるかのごごにつたへ來れる。

日本の大和の國は言靈の幸はふ國こそ
古言に流れ來れる
神言に傳へ來れる

此等は一の係を二の結にて結びたるものなるが如くに見ゆべけれども之もさにあらず下を並列法によりていひたるが爲に、茲か見ゆるにて之を左註の如く書き改めて見れば、之も亦一の係を一の結にて結びたるものなることは明に知られぬべし。

なつの夜もすしかりける山川ぞ波の底にや秋はや
ざれる。
うつゝにかいもがきませるいめにかもあれかまごへ
る。

かくしてやなほやまからん近からぬ道の間をなつみ
参る來て。

世をすてゝ入りにし道の言の葉ぞ哀もふかき色ぞ見
えける。

たちねこやいひややらまし。

此等は第二段の係の二つ重なりたるを一の第二段の結にて結び
たる例なり。

ゑのゝめにあかでわかれしたもこそをぞつゆやわけし
ご人のごがむる。

いのちをぞいかならんごは思ひこしいきてわかるゝ
よにこそありけれ。

花をこそ人や折るとてごがめしか數あらぬ身をいか

にかはせん

よそ人にごはれぬるかな君にこそ見せばやご思ふ袖
のゑづくを。

これを中島廣足翁の詞の玉の緒補遺に「こはこそををにて結べる
一格にて玉の緒にもいだされたり中間に見せばやといふことば
をはさみてごとうけ上のこの結びを下にをを置きたるなり。さ
てこれを初學の人はこそとかかれば「みせめ」と結ばざれば調はず
と思ふれどもそれはをにて結ぶことを知らざるひがごとなり云
々」とあれどもこれ廣足翁の誤解なり。そは、この歌の形を係結に變
動を起さぬ限に於て換ふれば、

〔我に〕君にこそ袖の雫を見せばやご思ふシカルニ。

よそ人に袖の雫を問はれぬる哉。

となりて君にこそ見せばやばやにて結びたる一の省略体の文
たるなり而して雫をのをは係詞にはあらざるなり。されば右の歌
はこそををにて承けたる次の歌の如きとは全く別物たるなり。

ほとゞぎす一聲とこそ思ひしをまらえてかはる我心かな。
以上述べたるところによりて、係結の規定表を新に作れば、
左の如し。

係詞の表

| 係詞 | 結詞 |
|-------------------|--------------------|
| 第一段のが徒はもどだにすらさへのみ | 動詞、形容詞、助動詞にて結ぶ場合には |
| 第二段ぞなんやか | その断止段に於ける語を以て結ぶ。 |
| 第三段こそ | その續体段に於ける語を以て結ぶ。 |
| | その已然段に於ける語を以て結ぶ。 |

(注 意)

(一) 右のはもどだにすらさへのみばかりは實は係詞にあらず、又のむも係詞にあらずともいひ得。又結詞も特更に第一段の結詞といふべきほどのものにもあらず。されば、右第一段の係結は強て此表中に存すべき必要なし。何時にても此表中より除去して可なり。

(二) 右のぞなんやかこそは文中の何處にありても係となる。

(三) 右の第一段の係詞と第二段の係詞と重なり、又は第一段の係詞と第三段の係詞と重なりてあらはるゝことは極めて例の少きことなり。

と第三段の係詞と重なりてあらはるゝことは普通のことなれども、第二段の係詞と他の第二段の係詞と重なり、又は第二段の係詞と第三段の係詞と重なり、又は第三段の係詞の二つ重なり、てあらはるゝことは極めて例の少きことなり。

(四) 第二段の係と第三段の係と重なりたる場合は第三段の結詞にて結ぶ。
(五) 第三段の係が二つ重なりたる場合には第三段の結詞にて結ぶ。

ある人は第二段の係、第三段の係は連体言已然言にてそれく、結ぶといふ。されど、さいふは非なり。第二段の結詞、第三段の結詞はたゞ連体言已然言と夫々同形なるかのみにて決して連体言已然言そのものにてはあらざればなり。

係結の規定

さて、左に係結の規定を説かん。
一文(主)部と説述部とを具へて獨立せるものの中に係詞あるときは、その文の終を相當の語を以て必ず結ぶ。
客部が文なるときは、その客部の終にて結ぶ。
命令文と禁止文とにては結ばず。

係結の規定

一合文に於ける章文の獨立せざるものに於ては上に係詞ありてもその章の終文は文の終にては結ばず。

二個以上の文の懸詞法にて連續したる場合に於ては上文に係詞ありても下文にては結ばず。

一文の説述語を省きたる場合(名詞等にて終りたる場合に於ては)上に係詞ありても下に於ては結ばず。

一甲の文の中に乙の文の一部分を挿入したる場合に於ては乙の文の中に係詞ありて結詞なしとてその係をば甲の文にては決して結ばず。

一つ「やよかなか哉の意のもの」は「やなんね」等にて終りたる歌文に於ては上に係詞ありても下に於ては結ばず。

右の如く上に係詞ありても下に之に應したる詞あるを係結といひ上に係詞ありても下に之に應したる詞のなきを轉

轉結

轉結の例

結といふ。

左に轉結の例を示さん。

播磨がたうらみてのみぞ過ぎしかごよひこまりぬ
あふの松原。
雪かごぞよそにみつれご櫻花をりては似たる色なかりけり。

珍しき春もあすごぞきこゆればくれなんごしを何かをしまん。
古へも月をのみこそながめしに今は日をまつ我身なりけり。
うき世にはながらへじごぞおもへごもしぬてふばかりかなしきはなし。
あひ見てはなくさむやごぞ思ひしになごりしもこそ

こひしかりけれ。

このぞのかゝりはしにて結びしが如くなれども、之は偶然に同じ形になりしにて結びたるにはあらず。

物をこそいはね。ご花も心あればさくべき程をすごしやはする。

是も結びたるにはあらず、理前のに同じ。

心こそうきよの外のやごなれ。ごすむごごかたき我身なりけり。

是れも結びたるにはあらず、理前のに同じ。

以上は章の中にては結ばぬ例なり。

櫻花今ぞさかり。ご人はいへご……。

あきたえの子はそれぞわがつま。

このかにやいづくのかに。

もえわたる我身をふじの山よ。

谷風にこくる氷のひまごこにうちいづる波や春の初花。

これらは説述語を省きたるために、名詞にて結びしがごごくなりし例なり。

のきはあるこの葉のいろはおそけれごなきや。ごやまの風ぞ身にあむ。

なにはづを今日こそみつの浦ごこにこれやこのよをうみわたる舟。

これは懸詞にて次にうつりたる爲めに結ばぬ例なり。

うめの花たが袖ふれしにほひごご春やむかしの月にごはばや。

おもかげのかすめる月ぞやそりける春やむかしの袖のなみだに。

これは他の歌文より引用したる句の中に係詞のある例にして、

「春やむかしは古今集の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身
ひさつはもとの身にして」の一句を引用せしなり。

春はまづあづまぢよりぞわかくさの言の葉つてよ、
むさしのゝ風。

これは命令文なるが故に下にて結ばぬ例なり。

右に説きたる係結法は中古を標準としたるものにて、上古、
近古を標準としたるものならず。上古に於ては、上古特別の
係結法ありしなり。今日に於てはまた今日特別の係結法あ
るべし。されば、上古を標準としていふときは中古の係結法
は破格たるべく、今日の係結法も亦破格たるべし。その代に、
また今日のを標準としていへば、中古のも破格、上古のも破
格たるべし。既に本講義の初に於てもいひしがごとく、文法
は時代につれて變遷して止まざるものなるが故に、上古又

は、中古に於けりし文法のみが未來永劫いつまでも正しき
ものなりとは思ふべからず。

呼 應

一。の。文。章。の。中。に。於。て。上。に。或。る。語。の。來。り。た。る。こ。き。下。に。之。に。
應。じ。た。る。語。を。要。す。る。こ。と。あ。り。か。く。上。下。に。相。應。す。る。語。の。あ。
る。を。呼。應。と。い。ふ。

前項に於て述べたりし係結も實はこの呼應の一種たる
なり。されども、今は係結以外の呼應の場合のみを専ら呼
應とよぶ。

呼應に種々あり。順次之を説かん。但し、時間の制限あるが故
に、特に必要なるものゝみを説かん。

呼應

呼應

時の呼應

過去の呼應

一、時の呼應

文。中。に。過。去。の。意。を。あ。ら。は。す。副。詞。あ。る。こ。き。は。そ。の。副。詞。の。添。
 加。し。た。る。用。言。動。詞。形。容。詞。等。は。之。に。應。じ。て。ま。た。過。去。の。意。を。
 あ。ら。は。す。も。の。た。る。を。要。す。

例

昔男ありけり。

去年見てし秋の月夜……。

けさあられふりき。

昨日きゝたりし話を今日人にかたる。

嘗て某新聞を見しに云々のこゝありき。

文。中。に。現。在。の。意。を。あ。ら。は。す。副。詞。あ。る。こ。き。は。そ。の。副。詞。の。添。
 加。し。た。る。用。言。動。詞。形。容。詞。等。は。之。に。應。じ。て。ま。た。現。在。の。意。を。

現在の呼應

あ。ら。は。す。も。の。た。る。を。要。す。

例

今此處に三人の男子あり。

今見る月も昔の月なり。

昨日きゝし話を今日人にかたる。

本年は暑氣特につよし。

今日は天氣うるはし。

文。中。に。未。來。の。意。を。あ。ら。は。す。副。詞。あ。る。こ。き。は。そ。の。副。詞。の。添。
 加。し。た。る。用。言。動。詞。形。容。詞。等。は。之。に。應。じ。て。ま。た。未。來。の。意。を。
 あ。ら。は。す。も。の。た。る。を。要。す。

未來の呼應

例

今見る月を明日の夜も見む。

昨日聞きし話を明日人にかたらむ。

來年も暑氣つよかるべし。

時の呼應

恒の呼應

明日も天氣うるはしからん。
 他日ゆるりと御説を伺はん。
 文中に恒の意をあらはす副詞あるときは、その副詞の添加したる用言動詞形容詞等は、之に應じて、また恒の意をあらはすものたるを要す。

例

天は常に高く、地はつねにひくじ。
 水はつねに低につく。

肯定の呼應

二、肯定・否定の呼應

文中に肯定の意をあらはす副詞又は否定の意をあらはす副詞のあるときは、その副詞の添加したる用言動詞形容詞等は、各それに應じて、また肯定又は否定の意をあらはすもの

のたることを要す。

頗る得色あり。
 専ら繪畫を勉強す。
 彼は優に乃父よりも技に巧なり。
 けにくく我あやまちたりけり。
 うべ山風をあらはこいふらん。
 生きて歸りしもの僅に三人なりき。
 けふはいさ不愉快なり。
 をさく劣るまじ。
 よに逢坂の關はゆるさじ。
 よもにがさじ。
 決して恐るべきものならず。
 絶えて來るものなし。

肯定・否定の呼應

毫もごるに足らず。
 少しもおもしろからず。
 人はいさ心もあらず。
 えもいひしらず。
 さらくいふべきにもあらず。
 さらく無理とは思はねど……。
 彼は必ず来るべし。
 必しも世人は皆腐敗せりとはいはず。

疑念の呼應

三、疑念の呼應

文。中。に。疑。惑。の。意。を。あ。ら。は。す。副。詞。あ。る。こ。き。は。そ。の。副。詞。の。添。
 加。し。た。る。用。言。動。詞。形。容。詞。等。は。夫。に。應。じ。て。ま。た。疑。念。の。意。を。
 あ。ら。は。す。も。の。た。る。こ。き。を。要。す。

例

疑ふらくは彼は偽君子ならん。
 恐らくは彼は我を誤解せしならん。
 夫あるひはあからん。

何誰幾如何何時何人何處等所謂何の類の語が上に來るこ
 きは、通例下にかさいふテニハ來る。此場合には、そのかは
 係詞となりて、係結法の規則に従ひて、その下に結詞をさる。
 何の類の語の下に來るこきは、或るものは疑念の意をあ
 らはし、或るものは轉じて尋問の意をあらはすものとなる。
 疑念の意をあらはすものゝ例は左の如し。

たがためにいかうてはか。唐衣千度八千度聲のうら
 むる。
 たれをたれさかわれは定めん。

いかにしていかにこの世をありへばか。しばしも物を
おもはざるべき。

何の類の語の下にかの來らざるこそあり。

例

いかにせん。

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいつこに月
やざるらん。

秋風にはつかりがねぞきこゆなる誰がたまづさをか
けて來つらん。

難波なる長良のはしもつくるなり今は我身は何にた
こへん。

涙川なみにみなかみをたづねけん。

心のは何こたへん。

何の類の語の下にぞいふ語來る。こきは、疑念は轉して尋
問となる。

例

あろがねのめぬきの太刀をさげはきてならのみやこ
をねるはたが子ぞ。

筏師よまてこごはん水上はいかばかりふくみねの
あらしぞ。

いかばかりくるしきものぞ。

たが袖ふれしやごの梅ぞも。

あきののにたがぬぎかけし藤袴ぞも。

前條のぞをば、ある必要の爲に、省略する。こごあり。

例

山吹のなご九重に咲かずなりにし。

夏草は去げりにけれど郭公なご我宿に一聲もせぬ。秋のむしなにわびしらに聲のする。たのみし陰に露やもりゆく。

秋萩のさくにしもなご鹿のあく。山吹の花いろころもぬしやたれ。

右例の何れもぞを省略したるものなることはその用言の續体段に於ける形なるにて明なり。

文の説述語を省略したる場合に於ては上に何の類の語ありても下に之に應ずる語なくして可あり。

なつのよの月まつほごの手すさびに岩もる清水いくむすびしつ。

淡路島かよふ千鳥のなく聲にいく夜ねさめぬ。まの關守。

呼ありて
應なし

呼ありて
應なし

ごしつもる宇治のはしもりことごはんいくよになりぬ。懸詞法にて一文が他の文に連続したる場合に於ては上文に何の類の語ありても下文は之に關せずして可なり。

例

いかばかり神もうれしご三笠山。いかにしていままで世には有明のつきせぬものをい

ごふころは。何の類の語をもといふ語にて承くるごきは疑の意は此處にて全く消滅す。

うば玉のやみのうつはさだかなるゆめにいくらもまさらざりけり。

まつにくる人くなれば春の野の若菜も何もかひな

疑の意消滅す

尋問の呼應

四、尋問の呼應

文中に尋問の意をあらはす副詞あるときはその副詞の添
加したる用言動詞形容詞等は夫に應じてまた尋問の意を
あらはすを要す。

例

試に問はんが極樂といふ處は實際にありや。
何の類の語の下にか又はその來りたる爲に疑念の意の轉
じて尋問の意となりたるものゝ例左の如し。

汝は誰をかよぶ。
汝は誰をよぶか。
汝は誰をよぶぞ。

疑轉して
問になる

反語の呼應

五、反語の呼應

文中に反語の意をあらはす副詞あるときはその副詞の添
ひたる用言動詞形容詞等は夫に應じてまた反語の意をあ

何が故にか汝はしかいふ。
何が故に汝はしかいふか。
何が故に汝はしかいふぞ。

(前項疑念の尋問に轉じたる例を参照すべし)

前條のか又はそをある必要の爲に省略することあり。

何故に汝はしかいふ。
何を恨むる。
いかばかりくるしき。
なご宮よりめしあるには参り玉はぬ。
御心地はいかおぼさるゝ。〇ごごへば……

ら。は。す。を。要。す。

例

豈に夫れしからんや。

況んや人間に於てをや。

なごかなごてかいかでか誰かいつくんぞあんなその類の語
又はやはかは等の語が上に來りて反語の意をあらはすこ
きは下は凡てやか又はその係を結ぶ場合に準すべし。

六、推量・想像の呼應

文中に推量又は想像の意をあらはす副詞あるときはその
副詞の添へる用言動詞形容詞等は夫に應じてまた推量又は
想像少くとも未定の意をあらはすものたるを要す。

思ふに此畫は雪舟の筆あるべし。

多分明日は着京致しませう。

推量
想像の呼應

希望の呼應

よもやわすれはすまじ。
よに逢坂の關はゆるさじ。
もしは之は我が心の迷ならん。
此説けだも眞に近からん。

七、希望の呼應

文中に希望の意をあらはす副詞あるときはその副詞の添
へる用言は夫に應じてまた希望の意をあらはすもの又は
未定の意のものたるを要す。

願はくは花のもとにて春死なんそのきさらぎのもち
づきのころ。

何卒御宥赦くたされたく候

冀くは高教をたれ給へ。

八、禁止の呼應

禁止の呼應

推量・想像の呼應・希望の呼應・禁止の呼應

文中に禁止の意をあらはす副詞あるときは、その副詞の添へる用言は、夫に應じて、また禁止の意をあらはすものたるを要す。

例

決して過度の勉強をばしたまふな。

ゆめく氷水をば飲みたまふな。

假設の呼應

九、假設の呼應

文中に假設の意の副詞あるときは、下之に應じて、また假設の意をあらはす語にて終るべきなり。

もし明日雨ふらば休會に致しませう。

明日はたごへ雨がふらうとも上野にゆかう。

よの中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。

當然の呼應

十、當然の呼應

文中に當然の意をあらはす副詞あるときは、その下に之に應じて當然の意をあらはす語あるべし。

人生意を得ば須らく權をつくすべし。

生きては當に雄圖四海を蓋ふべし、死しては當に芳聲を千祀に傳ふべし。

兵士はまさに櫛風沐雨を常の事と思はざるべからず。此外になほ數多あれども略す。

もしわれ女ならましかばかゝるごきいかにくやしからまし。

同主

同主

合文に於ては、主部は成るべく同一ならんを要す。然らざる
ときは、讀者をして往々理解を遅からしめ、又、屢く誤解に陥
らしむることあればなり。之は Unity of subject といひて、修辭
上重要なことなり。

或夜甲家に盜賊忍ひ入り財物を多く盜まれたり。

此文は、文法的に正實に解釋するときは、明に事實と相違せ
ることに解釋せらるべし。即ち、財物を盜まれたるものは甲
家にあらずして盜賊なることなる、又、さらずば、この文は敬
相に書きたるものごあるべし。是、上文(即ち章)に於ては主部
は盜賊にして、下文に於ては主部は省略せられておし、され
ば、省略法の通則によりて省略せられたる主部を此處に補

ふときは、その主部は是非とも盜賊たらざるべからず、此に
於て、この事實相違の不都合を生ずるなり。
この文をして誤解せられざらしめんには、
或夜甲家に盜賊忍ひ入り財物を多く盜みたり。
或夜甲家は、盜賊に忍ひ入れ、財物を多く盜まれたり。
或夜甲家に盜賊忍ひ入り甲家は、財物を多く盜まれた
り。
の三者のいつれかにせざるべからず。されども、この三者の
内、最も順當に最も理解し易きものは第一の文なり、第二之
に次ぎ、第三之に次ぐ。されば、予輩は此第一の文をとるべし。
身をたて道を行ひ名を後世に擧ぐ。
此文に於ては、主部は省略してある、我にて、同一なり。されば、
身たち道を行ひ名後世に擧がる。

此。比。し。て。大。に。理。解。し。易。く。且。つ。思。想。の。連。續。も。順。當。な。り。
 思。想。の。順。當。あ。る。文。は。や。が。て。理。解。し。や。す。き。文。な。り。近。來。文。筆。
 に。從。事。す。る。も。の。や。も。す。れ。ば。此。主。部。の。同。一。い。ふ。こ。と。を。
 忘。れ。て。猥。に。筆。を。走。す。須。ら。く。猛。省。す。べ。き。あ。り。

同相

同相

身。を。立。て。道。を。行。ひ。名。を。後。世。に。あ。ぐ。
 身。立。ち。道。行。は。れ。名。後。世。に。あ。が。る。
 前。者。に。於。け。る。三。文。は。皆。爲。相。即。ち。自。分。よ。り。事。を。爲。す。の。動。作。
 に。し。て。三。文。も。相。に。於。て。は。同。一。な。り。
 後。者。に。於。け。る。三。文。は。皆。成。相。即。ち。動。作。が。自。然。に。成。る。の。動。作。
 に。し。て。三。文。も。亦。相。に。於。て。は。同。一。な。り。
 同。一。の。相。の。連。續。し。た。る。も。の。は。理。解。力。に。抵。抗。す。る。こ。と。少。き。

が。故。に。理。解。し。易。か。れ。ど。も。異。な。り。た。る。相。の。連。續。し。た。る。も。の。
 は。理。解。力。に。抵。抗。す。る。こ。と。多。き。か。故。に。理。解。し。難。く。て。不。可。な。
 り。

身。た。ち。道。を。行。ひ。名。後。世。に。揚。が。る。
 甲。家。に。賊。忍。ひ。入。り。甲。家。財。物。を。ぬ。す。ま。れ。た。り。

の文の

身。を。た。て。道。を。行。ひ。名。を。後。世。に。揚。ぐ。
 身。た。ち。道。行。は。れ。名。後。世。に。揚。が。る。
 賊。甲。家。に。忍。ひ。入。り。家。財。を。盗。み。た。り。
 甲。家。賊。に。忍。ひ。入。ら。れ。財。物。を。ぬ。す。ま。れ。た。り。
 の。文。よ。り。も。理。解。し。易。か。ら。ざ。る。は。即。ち。此。故。な。り。
 天。に。日。月。あ。り。地。に。海。嶽。あ。り。
 西。に。富。嶽。を。の。ぞ。み。東。に。波。山。を。見。る。

此等は同相のものなるが故によけれども、
 天に日月あり、地に海嶽を望む。
 西に富嶽をのぞみ、東に波山見ゆ。
 此等は異相のものなるが故に、不可なり。
 甲山は漢文を乙田氏に學び、英文をスミス氏に教へら
 れ、數學は丙川氏を師とす。
 異相の連續せるものなるが故に、不可あり。
 甲山は漢文を乙田氏に學び、英文をスミス氏に習ひ、數
 學を丙川氏に學ぶ。
 同相にいふべきなり。
 左軍は勝ちたれども、右軍は敗られたり。
 之も不可あり。
 左軍は勝ちたれども、右軍はまけたり。

同相にいふべし。
 正男氏の父は、正男氏をして英語を學ばしめ、弟武男氏
 をして佛語を學ばしめ、妹はる子をして繪畫を學ばし
 めらるゝよし。
 之は同相の文なるが故に、可なり。あかれども、
 正男氏の父は正男氏をして英語を學ばしめ、弟武男氏
 は佛語を學び、妹はる子は繪畫を學ばしめらるゝよし。
 は不可なり。そは
 正男氏の父は正男氏をして英語を學ばしめ、(使役爲相)
 弟武男氏は佛語を學び………(自己爲相)
 妹はる子は繪畫を學ばしめらるゝ………(被役爲相)
 右の如く動作の相の異なればなり。
 先日進上仕候ひし品いまだ餘分澤山に御座候故もし